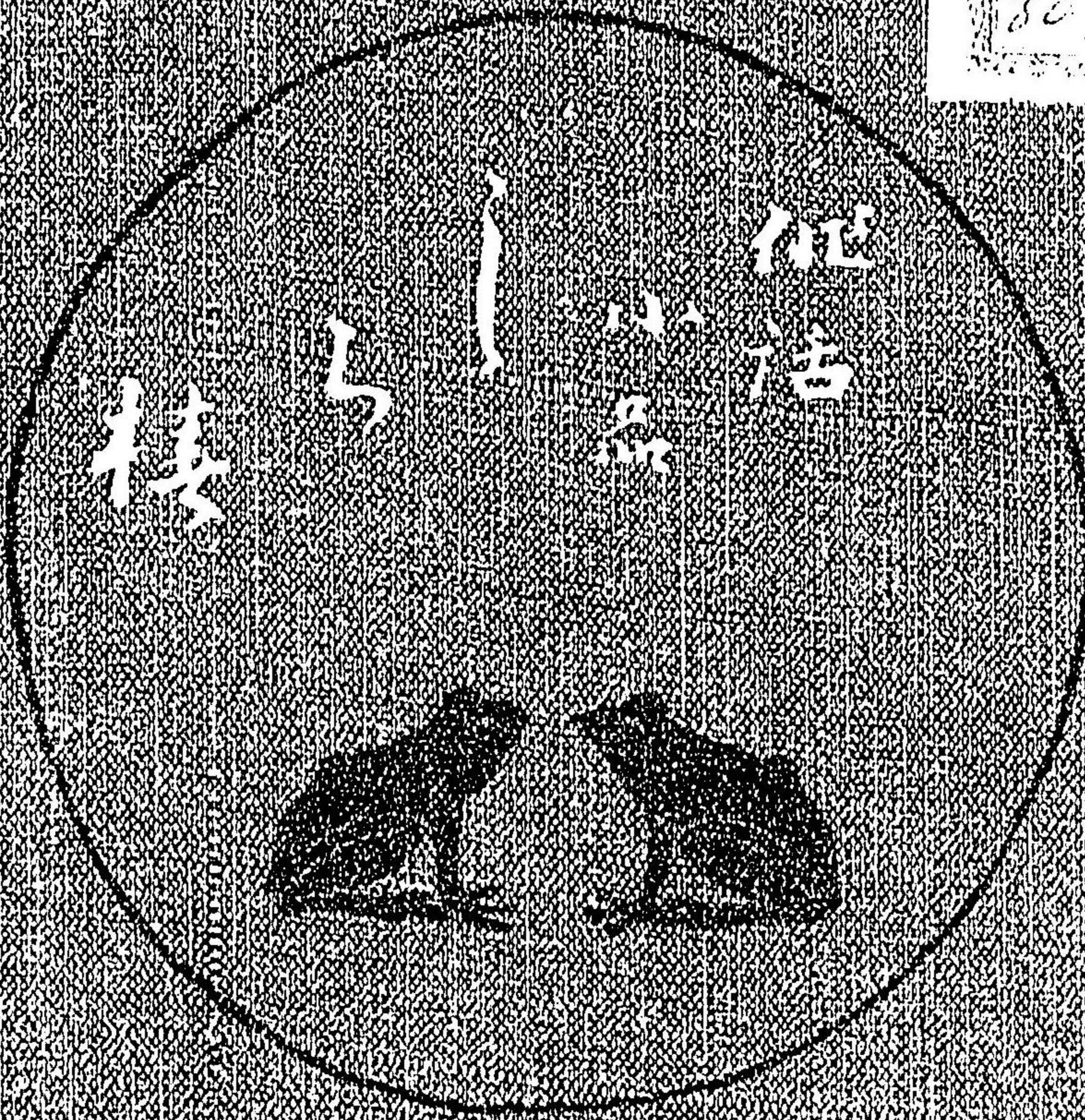
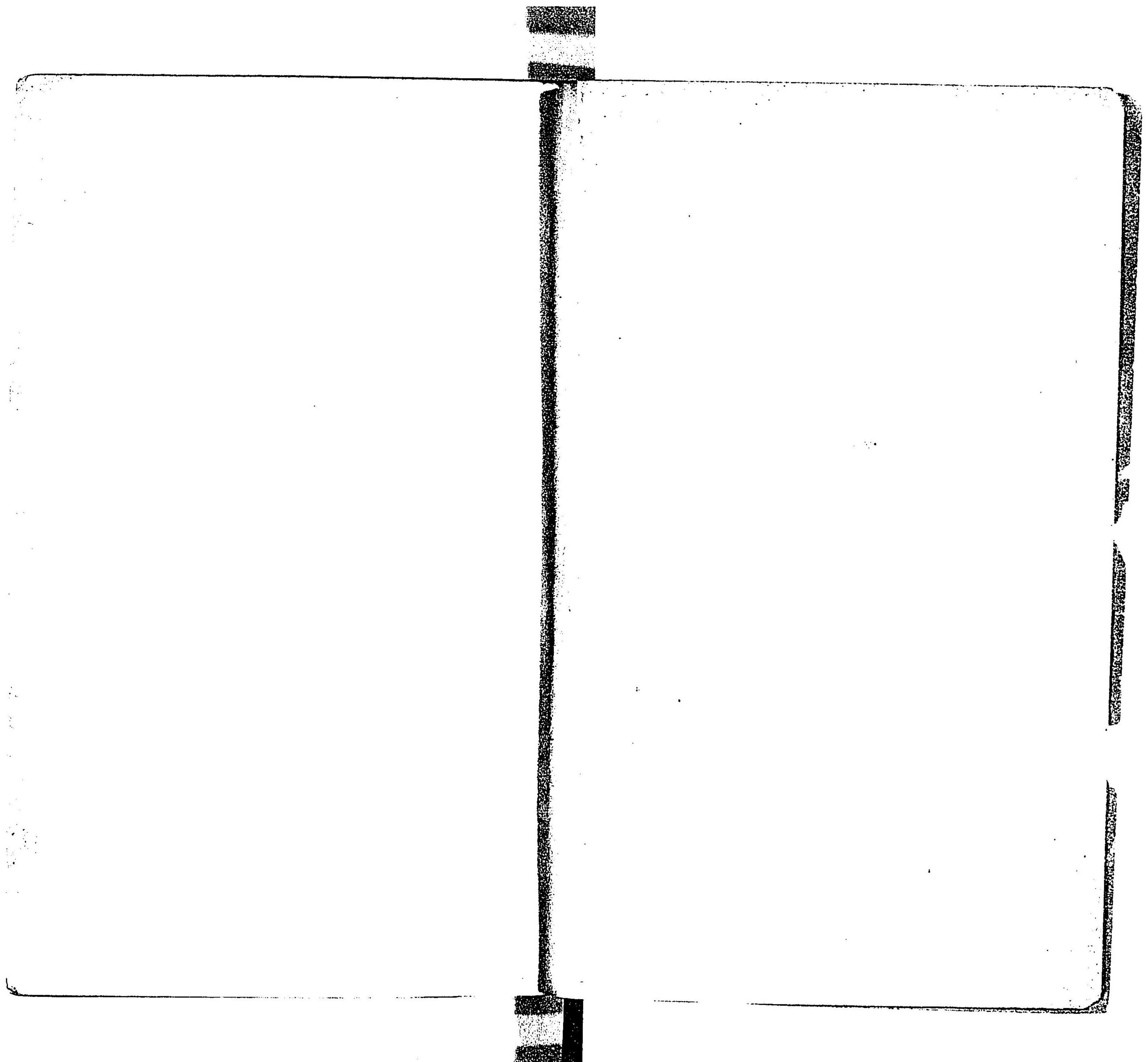


832  
809



能話  
樓馬







332-309



浪  
波  
瓊  
音  
著

俳  
諧  
語

東京  
博文館  
發行

明治  
45. 7. 22  
内交

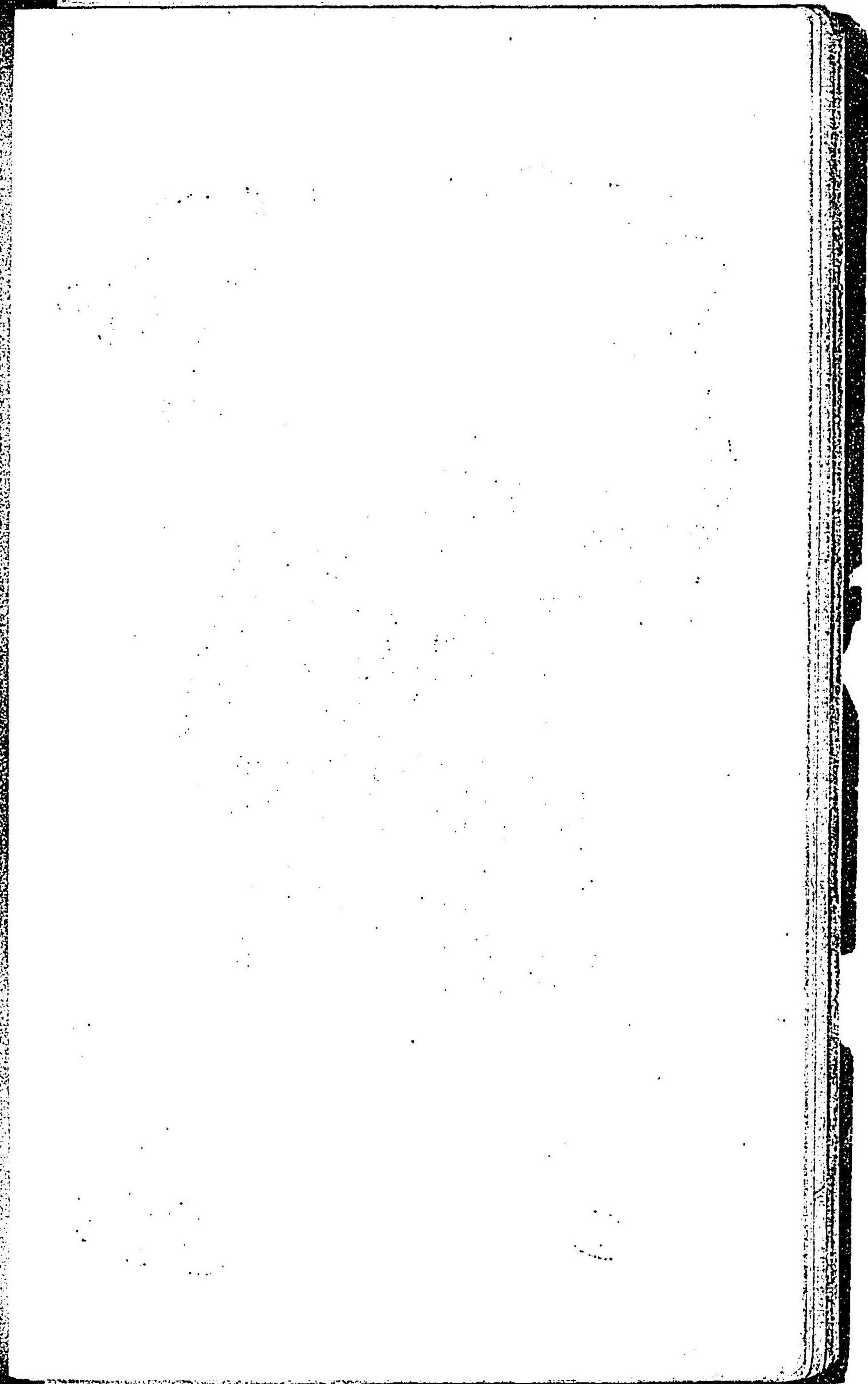




扇日本之春









## 自序

ここに收むるものに藝術ありや否や、我これを知らず。ここに收むるものに知識ありや否や、我これを知らず。唯是れ我に映りたる萬象の一部の影のみ。そこに眞あるは、小さきながらも眞あるは、我自ら信ずる所なり。この眞讀者の心に響くあらば、我が勞は酬いられたるなり。昔し空道和尚鬼貫に問うて曰く、如何なるか是れ汝が俳眼と。答へて曰く、庭前に白く咲いたる椿かなと。探て斯集に號く。



自序

明治四十五年五月二十三日

沼波瓊音識

凡例

一、この書は余の小品集の第五卷にあたるものなり。即ち四十三年東亞堂發行の「黙想の天地」に次ぐものなり。

一、書中の諸篇は、新潮、心の花、婦女界、中學世界、中學文壇、日本青年、俳味、讀賣新聞、時事新報、萬朝報、伊勢新聞に掲げしもの及び未發表のものなり。

一、排列の順序は通讀の折の興味を標準としたり。特に記述の時を云必要ある篇はこれを附記せり。

凡例





## 目次

一	白く咲いたる椿	一
二	汽車の旅	一一
三	萬葉集の心	一五
四	初日の出	一六
五	陽炎や	一七
六	櫻の色	一八
七	梅忠と經濟	一九
八	突當りまで行け	二〇
九	補刀	三一
十	りの字	三三

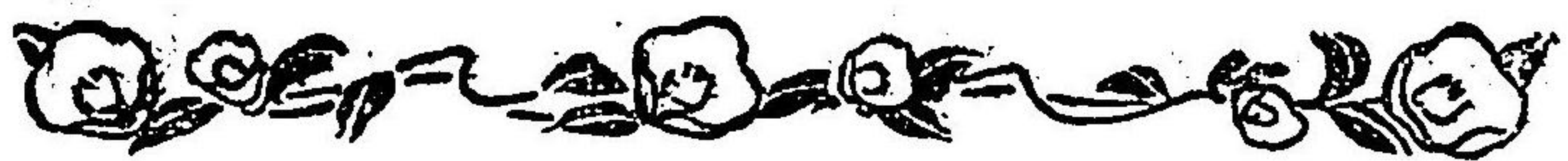
目次

凡例

一、書きし時の考と今の余の考と違ふものあり。されど故更これを改めず。

二





目次

十一	風流に御用無し	二二三
十二	定九郎と蚊	二二四
十三	堯舜世界	二二五
十四	己が爲	二二六
十五	作句は本能	二二七
十六	先生は馬	二二八
十七	我が身ながらも	二二九
十八	暑	二三〇
十九	彼	二三三
廿	初夏の俳句	三三五
廿一	炎暑の俳句	四四七
廿二	自句自註	五五六



目次

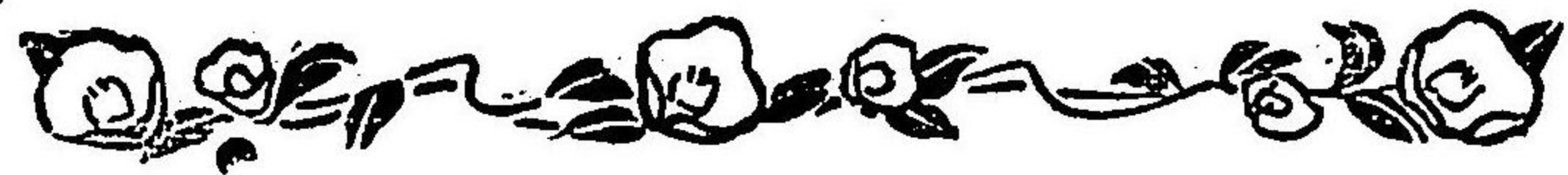
廿三	兩國川開き	六六一
廿四	新秋なる哉	六二二
廿五	朝酒	六六七
廿六	博徒	六六八
廿七	浄土か	六六九
廿八	生活の二部	七〇〇
廿九	外套	七〇二
卅	煽風器	七〇四
卅一	女	七〇五
卅二	朝	七〇七
卅三	蘆雪の山姥	七〇九
卅四	あわ雪	七一八





目次

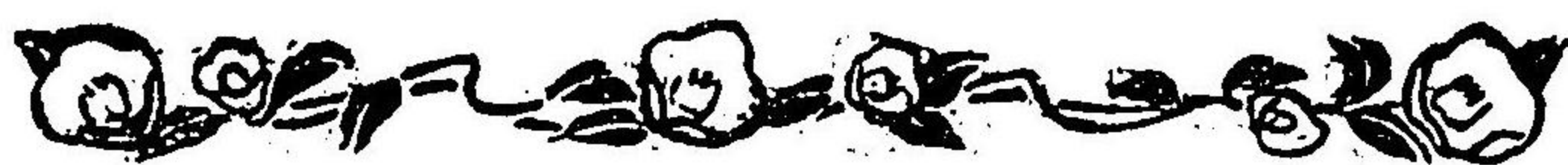
卅五	臍の光	八二
卅六	恍たり	八五
卅七	餘裕	八六
卅八	順風耳	八七
卅九	宗因の句	九〇
四十	厭なもの	九一
四十一	折句	九一
四十二	中家小家の作	九二
四十三	作者の俤	九二
四十四	再び讀め	九三
四十五	巧なる會話	九三
四十六	曇天	九四



目次

四十七	編輯室の閃感	九五
四十八	人間の目	九五
四十九	簡性	九五
五十	膾炙されるもの	九六
五十一	流露	九七
五十二	英雄も數字	九八
五十三	途中作	九九
五十四	雪花雲月	一〇〇
五十五	古道人の詩	一〇一
五十六	紙燭	一〇一
五十七	陶刻の引札	一〇二
五十八	唯沒頭せよ	一〇四





目次

五十九 不可研究……………一〇九

六十 教へられ……………一二二

六十一 天龍忌……………一一六

六十二 行方不明……………一二四

六十三 斯子……………一三四

六十四 裸百貫……………一四六

六十五 入學試験……………一六四

六十六 未來の畏怖……………二七九

六十七 妻の病……………二八九

六十八 町屋まで……………三〇八

六十九 馬琴の嫌ひな所以……………三一七

七十 青年と夏……………三三〇



七十一 絶對の悲哀……………三二五

七十二 一夜船の狐……………三三一

七十三 蟲の聲……………三三三

七十四 月……………三四〇

七十五 一視……………三五五

七十六 その月々……………三九五

七十七 俳諧文反古……………四二四

目次



目次終



小俳話しる椿

沼波瓊音

白く咲いたる椿

(瓊音素枝問答)

俳味といふものゝ何物たるかを説くには、先づ俳諧と云ふものゝ著しい特色を導く必要がある。先づ第一に自分の感じたところを其儘に言つてゐる、と言へば和歌でも人の心を種としてだが、俳句ではそれを著しく無遠慮にやつてゐる、我儘な所がある。この我儘な所がよいのだ。併しどうだらう、これが特色といふことがいへるだらうか。

枝えゝ萬葉集の心なりでしよ、一寸見るとさうでなくつても、ちいつと見て居

白く咲いたる椿





ると眼鏡の度が合つて来るやうにさうなります。

音「それから次に俳諧は何でも御座れどんなものでも捨てないと云ふ事がいひ度い。つまり対象の領してゐる時間空間の大小によつて価値の上下を附けない。といふと莫迦に難しいが大小を同一視してゐる。『梅が香や乞食の家も覗かる、』は乞食の家だから俳味である、かう思つてゐる人があるけれど、夫は間違ひで、『白梅や墨芳しき鴻臚館』もやはり俳味だ。どちらも面白いので、完全な物、立派な物は俳味ぢやないと思つてゐるのは非常な間違ひで、今日迄の俳味でもさうだ。芭蕉が一簣一杖で飄々と行脚をしてゐたものだから貧乏らしい聯想で消極的のやうに見えるが、元祿の昔にあつてもさうぢやなかつた。芭蕉自身の性格でもさうのみぢや無かつた。貧富貴賤を凡て同一視してゐる。雅俗なんでものは頭から差別を認めない。僕が和歌を習つて居る時に、物に成つてゐないのだが、『妾宅の忍返しに春の雪降る』といふ事を詠んだ。するとこの妾宅とか忍返しとかいふ事は極め



て俗な物だから、到底和歌にならんといふ評を附けて返草された。夫から僕は憤然として、こんな事を言つとつちや駄目だと思つた。俳諧の方ではかうは言はぬ女郎とお姫様との価値の差別は認められない。前に言つた事と重複するかも知らんが、美醜の別もないんだな。是は誰にも言舊された事だが糞尿に至るまで歌はれてゐる。今日電車の中で白樺のロダン號を讀んだが、その受賣をすればロダンが始めて『鼻かけの人』を出して世を驚した時、新しい美を要求してゐた人々は吾々が求めるのはこんな新しい醜ぢやないと言つて失望した。すると『かの小さい醜い一つの首は、當惑げに己れが其新しい美なんだよと云つて眼をまぢ／＼させたのであつた』ロダンは醜の美を認めた、婆さんの下腹の垂下つた皺にも美を認めた。其の態度は元祿の俳人の態度で、それは天保時代の末世に至るまでもその醜を認めぬ潮流はあつた。俳人眼中美醜なしである。凡てに平等なのがその一特色なんだ。





も一つの特色は、科學者の眞似をして命名をしてから取懸ると、秋の夕方などに、「あゝ淋しい」と感ずる、それは閃光のやうにパツと來る、理窟も何も無い、假りにこれを閃覺と名付ける。その淋しい感が暫らくあつて後、吾身の不遇とか外界の壓迫とか、果は人生存在の意義に對する不安、といふやうな、種々な方面の感じが湧いて來よう。それは理覺、變な名だが斯う名づけておく。何か理由のあつて起る感覺なのだ。漢詩には必ずこの理覺がある。秋風蕭々不遇を嘆じたり何かしてゐる。俳諧はこの閃覺を根本義としてゐるんだ。俳句講話に書いたことを爰に繰返す。露伴の傑作『土偶木偶』にかういふ所がある。主人公が前世自分の爲に情に死んだ女の所へ夢の如くに往つて、風呂に入る、風呂を出ると闇の中から木屋の匂ひが漂つて來る時、あれは前の世に自分が植ゑたものだなと思ふ、頗ぞつとさせる趣がある。この浴室を出て木屋の香をきくと云事はさういふ幻境でなくつても一の獨立した詩趣である。幻境を助ける附屬趣でなく、獨立しうる趣がある。

俳諧はこの獨立の趣味を寫すもの、他の文藝は背景として夫を用ひてゐる。詩趣の獨立といふ事を空間的にいへばかうなる。

凡て前に挙げた三つは夫々互に關係したもので、これ等は俳諧の本義の重なるものであると思ふ。俳諧は季題趣味だなどと狭く限つてはいけない、俳諧は俳諧で今迄に建設された發句及連句といふものである。連句は近頃人に判らなくなつて、僕にも感情のリズム、一高一低する音波の味ひをまだ充分に味へない、然し句々の妙味とそして俳人の趣味といふものは、季題のみではない、季の有無に拘はらず一切の自然人事に立脚してゐる、と云ふ事が之に依て解つた。連句の季題によらない即ち雜の句を擧げて見よう。

子をほめつゝも難少しいふ  
風邪引き給ふ聲の美し  
衆生の錢をすくひ取らるゝ

白く咲いたる椿







死なすば人の何になるべき  
齒抜となれば貝も吹かれず  
瘤がなければ女房とりもつ  
里近くなる馬の足あと

枝「これは俳感だ、實感だ、そして俳感だ。俳諧はウイットぢやない。  
音「ウイットぢや斷じて無い。」

終りの知れぬ下手の舞まひ  
肥えて氣味よき豚の寝姿

この豚は翁の句だ。それから**是はちと川柳のやうだが**

提灯騒ぐ切の狂言

切狂言の舞臺が見えるやうだ、誰の句かと思ふ、**文章だ。**

枝「是だから連句を見なければ判らない。」



音「さうさ。發句だけ見て其人を論ずることは全く貧弱だ……俳諧といふものはまあこんなものだらう。それから愈俳味といふものはどんなものだらう。什麼生俳味なんだな、曰く以上の態度の人が感得した趣味感だといふ外はあるまい。一言に言へば俳人の趣味である、俳味の相は對象にない。」

枝「此方に、己れにあるんで！」

音「俳人の己れにあるんだな、よく茶が、つたとか、何とか茶碗の煤けたのや、端の缺けたのを悦んだり、不破關屋のやうな、大津街道に馬の糞の落ちてゐるやうなのをばかり俳味だと思つてゐるが、俳味といふものはそんなものぢやア無いやな」

枝「與三ですな、俳諧立治店ですな」

音「無論乞食が俳味と誤解されるには、誤解される原因があるさ。つまりどんなものでも捨てないといふことの爲なんだ。」



歴史の事はよく知らんけれども、文學史的にいへば最も古く現はれた俳味はこれを枕の草子に見る。枕の草子の特色といふものは、自分の趣味のみを標準としてどんな事でも言つてゐる、大いに閃覺的で、そして大小平等感である。この點に於て枕の草子は尊い文學である。さて俳味といふものはどういふものと云ふことはいへぬ、これが俳味だといふ例をとつちやいかん。以上のやうな考を持つた人が書を描けば俳畫で、文を書けば俳文、小さい形の詩にすれば俳句である。

茲「成程枕の草子の『いたく肥えたるは、眠たからん人と思はる』といつたやうな感覺は俳味ですな。然し俳味哲學といふもの、少なくとも芭蕉の哲學は徒然草に負ふ所があると思ひますが……もし兼好のデイシブルを求めれば芭蕉とこれは少しどうかと思はれるが、西鶴とを擧げて見たいと思ひます。二人共俳人なのが面白ありませんか

音、それから俳句といふことだが、『名月や烟道行く水の上』は名月の夜にあゝあ

そこに水の上を烟が這つて行く、とそれが俳人の目についたのだ、何も俳人はどうしたら名月らしい事がいへるかと思つて、その中心なり焦點なりを目を血走らせて探すんぢや無い。よく俳句の作法や何かで説いてゐるが、あれはサタンの言だ。さういふ事を思ふのが非常にいけない。今迄明治の新俳人諸先生はいろいろ「新風鼓吹に骨を折られていろ／＼な訓を垂れたが、これは唯先生方が衆生を導く爲の方便であつて、お説きになつた所は至極御尤で、その勞力は御苦勞様であるが、どういふものか衆生は皆墮獄するんだな。これは衆生の罪か導師の罪か知れないが、聞き方も悪かつたが言方も悪かつた。もう一步進めて言へば、言ひ方が悪いといへば、よく判つて、其の判つてゐる事を言現すエキスプレッションの方法が悪かつたといふことになるが、果してさうであるか、或は根本的に判つて居なかつたのかわからぬ。私かに思ふに唯研究々々と夫に許り熱中された結果、かゝる慘狀を見るに至つたやうに思はれる。



それから面白いのは俳句が金にならん所だ。そして俳句は難しいものだ、閃覺その物が詩でなきやならんからだ、閃覺悉く詩美を成すやうでなければ眞の俳句はできない。世が複雑になればなる程俳句に歌はれるやうな簡単な思想はなくなりさうなものだが、新しい簡単な思想が續々現れる、何も俳句許り作てる必要はないのだから、複雑な思想は他の形式を借りて試るがよい。又俳句には何を歌つても宜いと思ふ。理覺もよい、恬淡の代りに執着を歌つてもよい。

枝、知識を入れても差支へないと思ひますな。俳句は詩ぢやないといふ事をきいたが或はさうかも知れない。和歌は感情の調子、俳句は頭腦の調子と言はれるが、頭腦の調子でもいゝ。格言的なものもいゝと思ひますが……夫から季節趣味といふものは都會人には判らない。殊に今の人間は故人の句集から教養された丈で俳味といふものは地方の人の専有のやうに言はれますが、一體吾々にどれ程吾々の有といふものがあります。直接に自然や人生から得たといふよりも、人の言語や

紙の上から得た事が多いんですけれど、深く感受するんなら書籍からでもよからうと思ふんです。古人の句集や季節から養はれたにしろ面白ければいゝんでせう俳味がクラシックだと言はれゝば悦んで甘受しませう。クラシックと言つても蕪村等の古典趣味ぢやないんです。ホイッスラアだつてクラシックなんですからね。ホイッスラアといへばあのノクタアンのやうな印象的な句が作つて見たいと思ひます。都會趣味、市井趣味もいゝもんですから。うん、夫から俳句といふものを誰しも一遍宛潜る、障害物競走の綱のやうにいふ人があるけれど、俳句は却つて戴囊競走の囊のやうなものだらうと思ふんです。

## 汽車の旅

甲某、乙某の文を評して、あの男の文は汽車で旅するやうな文だ、と云つたのを聞いたことがある。この際この言は、大急ぎで書くといふ意味では無かつた。汽車



で無暗にズン／＼と急いで旅する人がある。國府津の波も知つてる、富士山も知つてる、静岡の町も知つてる、濱名湖も知つてる、名古屋城も知つてる、琵琶湖も知つてる。併しそれはたい汽車の窓から見たばかりである。富士の登山が如何に苦しく壯快であるか、琵琶湖畔の所謂近江八景がどんな趣のものか等の事は頓と知らぬ。乙某は評論家である。そして可なり博識である、時事問題の起る毎にそれに關係のある諸事項を知つてゐて、頗る材料豊富な評論文を作る。ところが讀む者は、乙某はいろんな事を知つてゐるなあと思ふだけで何等の感動を與へられぬ。甲某の評言はこれを汽車の旅に喩へたのである。

俳句に碧巖の語を使つたり、古い小唄の文句を入れたり、或は清盛を描き、大雅堂を描き、そしてそれを誦すると、唯さう云ふものが使つてあると云ふ事を感ずるだけで、何の興も起らぬのがある。支考の、

## 歌書よりも軍書に悲し吉野山

と云句を誦すると、支考は歌書に於ける吉野山を知つてた、又軍書に於ける吉野山を知つてた、と云事を別に感心もせず知得する外何の感も起らぬ。梅を寫し、櫻を寫し、燕子花を寫し、百日紅を寫し、女郎花を寫し、茶の花を寫し、水仙を寫し、合計七句を得て、七つの花を見たと言印にするのみなるよりは、女郎花のみをよく／＼味つて、女郎花の形や色のみで無く、その性情をも會得し、遂には己れが女郎花其者になつて、思はず吐露した一句を得たい。そして他の花を顧みなくても、さう云句が出来たら、永久に大俳人として傳へて宜しい。

## さまざまの事思ひ出す櫻かな

と云芭蕉の句がある。誰も知る如く、これは久しぶりに郷里伊賀に歸つた時の吟である。この句を見て大抵の人は、さまざまの事を思ひ出す、折しも櫻が咲いてると云やうに上五中七と下五と少し離して感ずる。かう云風に感ずると、この句は芭蕉が心中を寫して、それにはんの添へ物に櫻を出したことになる。これはこの



句を本當に解し得たもので無い。もつとも芭蕉がこの句に自分の心中境遇をも寫してゐることは勿論であるが、決して芭蕉が芭蕉のみを寫した句では無い。これは儼として櫻の句である。「さまじく」の事思出す」と云事に、「櫻かな」がぶら下つてゐるのでは無くて、「櫻かな」が主で、その形容に「さまじく」の事思ひ出す」が冠さつてゐるのである。

櫻にはいろいろの性情がある。唯人を浮かれさせると云一性情あるのみでは斷じて無い。櫻には一面に人の氣を滅入らしめる深い哀趣があるのである。芭蕉の句は前書や何かを除いてもその一句のみでわかる、絶對の獨立俳句のみを作つた人である。これは先人も云つて居る。この句も芭蕉の歸郷等の行動には斷じて關係しない。たゞ櫻の句で、櫻の哀趣を歌つた句である。櫻の性情をよく會得した句である。而して歸郷して人と昔を語つたと云事は、この句を成す動機になつたまゝである。汽車で突走らずして、所々に下車し、富士にも登り、八景をも巡る底

の句である。見給へ、この櫻の句には櫻のみが描かれてゐるのみで、何の配合物も無いと云得る。そして人の見付けなかつた櫻の一性情を明かに描寫してゐるでは無いか。所々で下車するだけの餘裕の無い人は、句を作る資格は無い。文藝の埒外にある評論文だも作る資格は無いのである。

### 萬葉集の心

俳諧は萬葉集の心なり、とは芭蕉の言と傳へられてゐる。成程芭蕉の言らしい。詩といふものはかくくのもの、個條書きのやうなものを作つて、強ひて詩といふものに限界の線を劃する等は、あれは研究者輩の遊戯である。俳諧は斯くくのものと同様な抽象文字を並べたがる人がある。又自分は俳諧を斯くくの方針で造りたいと、政治でも行るやうな態度で進む人がある。皆快く俳を談ずる相手にはならぬ手合だ。人若し俳諧を問はば、萬葉集の心なり。善哉哉。最も明確で



最も具體的な答である。これは庭前の栢樹子の類ではない。

萬葉集は技巧を自覺せざる文藝である。言はざるを得ずして言つた語である。歌はざるを得ずして歌つた歌である。上は天皇より下は乞食に至るまで、一堂に會して、些の隠蔽無く、銜氣無く、思ふ儘を聲を放つて歌つて居る。赤子の心に復つて人始めて真人たり。萬葉集の心に復つて詩始めて眞詩たり。芭蕉は俳諧よ眞詩たれ、と垂示したのである。

### 初日の出

新年の旭日は今濱離宮の上に昇る。愛宕山の鐵柵に沿うて立つてる無數の人の顔が輝く。拍手の音がそこゝに起つて、何となくシンとする。いろんな人がこゝに居るのだ。初日の出を拜すれば今年の運が善いと云ことを確信して一心に拜する人も居る。さう云信仰があるでも無いが初日の出を拜すると何となく新年が

來たらしくて好い心持だから來てる、人も居る。みんなが見たと云ものを見ないと云事が業腹だてえんで來てるのもある。別にどうと云ことも無いけれど、早く目が覺めたから來て見た人もある。この中に俳人が二人居る。甲は何か初日の出の名吟を作らうと思つてそれ故出張して八方に血眼を働かして居る。乙はこの天地の光景、人々の様子などを耐らなく面白がつて居る、句を作らうとは思つては居ない、たゞ莞爾々々して居る。

### 陽炎や

「陽炎や手に下駄はいて善光寺」と云ふ有名な一茶の句を、友人松魚君が口吟んで、「僕はこの句は非常にいゝ句だと思ふ、この句を吟ずると、何とも云へぬ暗澹たる趣に襲はれる、黒い雲が頭上に低れたやうに感ずる」と云。僕は驚いた。僕はこの句を吟ずる毎に、たゞ長閑な光景で、そしていくらか滑稽な味も加はつてる、



と思つてた。暗澹あんたんなんぞと云趣は思ひもよらなかつた。成程なるほど左う云眼で見ると左う云趣もあるやうに思はれる。自然しぜん光景くわうけいに固定した意義は無い、それを其儘寫す俳句にも固定した意義は無い。そこが面白い。見る人の心々に任せおきて高根に出づる秋の夜の月。

## 櫻の花

或る春の夕暮ゆふぐ子供を連れて上野の花を觀た。子供が花を仰いで歩く様を、通り蒐つた松本愛重氏が笑ひながら見て行き過ぎた。私は松本氏の顔をよく知つてゐる。氏は私を知らぬ。行き過ぎざまに氏は其の同伴者に語るやう、「櫻といふものが、もつと赤い色をしてたら、子供は嘔喜おうきぶであらう云々」。成程なるほどさうであらう。これが眞紅まつかのものであつたら子供は狂喜するに違ない、私の子供は全く物足りぬやうな顔をして觀て居たのを氏が認めて斯う云つたのだらう。私も子供の物足りぬ顔

つきを知つてた。下等な繪には櫻が眞紅まつかに彩いろどつてある。これは下等な繪師の理想を描いたもので、又下等な繪の玩賞家の理想を描いたものだ。趣味の低い人は櫻の紅なるを好むことを現はしてゐる。併し我々は眞紅の色の櫻が霞か雲かとやうに咲亂さかみだれたら、見るに耐へぬであらう。天地を籠めて咲く櫻の色は淡い、地に低く咲く、或は一輪りんづゝ離れて咲く、躑躅つじ、牡丹の如きは色が濃い。爰に造化の意匠いしやうがある。造化の意匠をよく體得するが、俳人の第一爲さねばならぬ事である。

## 梅忠と經濟

S法學士にふつと道みちで會つた。いろんな話をした。S君云、君は暇のある時に何をして居ます。本ほんを讀んで居ます。何を讀んでます。まあおもに文學の本ですなあ。國家とか經濟とかいふ事に關係しないで、文學を味へるか知らん。僕は噴出した。僕はてんで國家とかいふ事は考へたことが無い、そんな事を考へなくつたつて文



學は味へるさ。ふうん左うかなあ。さうぢや無いかね。たとへば會根崎心中に國家があるかね、經濟があるかね。會根崎心中には無いかも知れないが、梅忠には經濟問題がある。成程さういふ風に見れば、會根崎にも經濟や國家もあるだらう。と僕は笑つちまつた。翻つて思ふに笑ふべきぢや無い。S君は法學士である、國家經濟が絶えず頭にある、何者を見るにも其の眼で見且つ解く。俳句する人は何を見るにも俳眼を以て見ねばならぬ。何者にも俳句がある、社會主義にも千里眼にも俳句があることを發見せねばならぬ。S法學士の態度は學ぶべきものである。

突當りまで行け

路脚下に岐るゝ毎に、どちらへ進まうかと躊躇して、その爲に途が抄取らないで居る人が多い。損なことである。賑やかな句が面白い、人事句、都會句が面白い、その方へ向かうかと考へる。淋しい句が面白い、自然句、田園句が面白い、

その方へ向かうかと考へる。句集を讀めば讀む程いろ／＼な路のあるのを發見する、一方の路へ進みかけては、又他方の路に向ふ、そして行く處まで行き得ずして終る。損な事である。それよりは初め面白いと思つた路へズン／＼歩み進んで、突當りまで行つて仕舞ふが宜い。一路の突當りは即ち萬路の開く源である。そこまで行けば萬路指呼の間に在り。其角は酒肉の間に俳趣を認めてその一路を突當りまで行つた。惟然も行つた。一茶も行つた。南極探検は他人をして勝手にやらせるが宜い。我々は俳道の突當りまで行かねばならぬ。

補 刀

印判屋と篆刻師とどういふ所が違ふか。印判屋は筆の工合が奇麗に行かぬと、幾度もその上を彫つて、奇麗に、或は勢よくする。譬へば提灯屋が字を書くのと同じ筆法だ。これを補刀といふ。

突當りまで行け 補刀



篆刻師に至つては斷じてその補刀をせぬ。勢が思ふやうに出ぬと、それはそれで止めにして置く。故に篆刻師の作物には甚しく出来不出来がある。併し印判屋の作物には大して出来不出来が無い。

この補刀をやつて平氣で居るか否か、眞俳人か、似而非俳人かの分れ目である。眞の人間か、否かの分れ目である。嗚呼補刀はしたくない。印判屋にはなりたく無い。篆刻師になりたい。これが我黨の理想である。

りの字

平假名の「り」の字を幼児に見せ、この字を知つてるかと思ふ。答へて曰く「缺だ」と。逆も大人が一月考へたとてこんな飛離れた面白い觀察は出来まい。りの字は成程いはれて見ると缺に似てゐる。幼児で無くては出来ぬ表示である。俳句は、所謂伶俐な頭で物を觀察して居ては駄目だ。馬鹿になつて赤子に歸つて、生れた儘の心

になつて萬象に對すべきである。りの字を缺と觀する調子で、物を描くが可い。吾黨は時々幼兒に近き、幼兒の言に聽け、そこに天來の妙訓を得ることがあらう。芭蕉が、他門の俳諧は其門の巧者で無くては名句が出来ぬ、我門の俳諧は、小兒と雖時に名句あり、と云つたとか。芭蕉の鼓吹した俳風はこゝの所が尊いのである。盛に知識を磨け、而して盛に知識を忘れよ。斯くて五體は漸く俳化さるゝであらう。

風流に御用無し

加州侯が信州柏原を通行の節、名主嘉左衛門をして一茶を招かせた。名主一茶の許に至り、得意げに、加州侯がそなたの風流の名を聞き給ひ謁を賜ふとのこと、何しろ百萬石の城主の御用だから、御氣色の變らぬうちに急いで伺はれよと云つた。一茶笑つて曰く、風流に御用無し、若し風流に對し御用とあらば、如何なる高貴の方なりとも面會無用なりと。名主狼狽、御用といつたは全く我が粗忽とい



ろく説いて候に面會させた。面會はしたが全く對等の態度で俳人の面目を汚さなかつた。風流に御用無し、壯なる哉言や。これを今の言に譯せば、藝術は絶対に自由なり、藝術は世俗の尊貴を無視す、と云ことである。官憲の権力が藝術の範圍に及ぶと云事は、藝術の爲最も厭ふべく、恐るべき事である。風流に御用無し。風流に御用無し。

## 定九郎と蚊

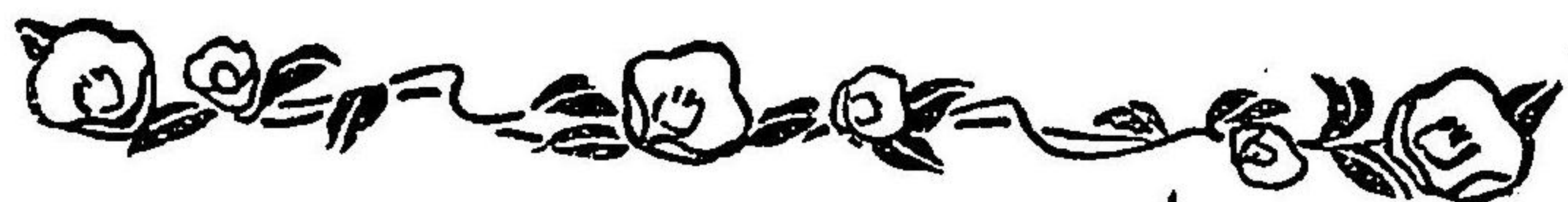
大端折りの定九郎が與市兵衛を殺して刀を拭つて、それから懐へ兩手を入れて金を數へる。金の額が多いので段々ニヤ／＼と、笑を漏らす。見物諸君、いたづらに眞白に塗つた定九郎の顔にのみ憧る、勿れ。乞ふ彼の足を見よ。など、今更らしく云立てるでも無いが、誰が演つても遣るとだが、彼は片方の足の平で片方の脛を時々打つのである。そのピシヤリ／＼と云ふ音が、舞臺が静な時だから、耳

立つて聞える。ハ、ア蚊が食ふのだ、なと見物は、慘事と慘事の間にて、何か斯う遊ばされるやうな氣がして、一種の快味を感じる。定九郎が與市兵衛を挾つて五十兩と云ふ大金を奪つた。人間界の慘事であるが、自然(汎意の)には何の影響も無い。山崎街道の藪蚊は依然として聲を立て、人の肉を見るや喜んで刺す。蚊が刺す。これは小事である、凡事である。人を殺す。これは大事である、異事である。大事の前に小事は見落され易い、異事の前に凡事は見落され易い。これを見落さぬのが俳人である。大中小、異中凡に非常な趣があるのだ。それが俳諧である。定九郎に蚊を配したる昔の人は、俳味と云ふものを解して居た。それを見て快味を感じる見物も、知らぬ間に俳味を解して居たのだ。

## 堯舜世界

傳習録に曰くさ。一日の間に世界が一めぐりする。未だ明けず夜氣清明、視る





無く聴く無く思ふ無く作す無し、淡然平懐、これあ義皇世界だ。明け離れて神清み氣朗かに雍々穆々、これあ堯舜世界だ。所謂午前中、禮儀交會、氣象秩然、これあ三代世界だ。午後になると神氣漸く昏く、往來雜擾、これあ春秋戰國世界だ。段段と日が昏れて行く、萬物寢息、景象寢寥、これあ人消物盡世界だと。面白い哉言や。我等の俳座はこの堯舜世界に置きたいと思ふ。義皇已上では一語も言へぬ。堯舜世界が恰好である。三代俳諧、戰國俳諧は他に委して宜い。

### 己 が 爲

孔子曰く、古の學者は己が爲にす、今の學者は人の爲にすと。この言は道德以外の意味にも擴げられる。文藝でも、斯う書いたら受けるだらう、など、人を自あてにして技巧するのは、陋にして劣なるものである。自分が感じたこと、それを其儘現はすには、どう書いたら宜いだらう、と自分が満足するまで推敲する。



これは己が爲と云つて宜い。これは高くして大いなることである。そして其結果はどうかといふと、人を自あてにしたのは、其の爲に起る厭味の爲に、眞正の歡迎を受け得ぬ。己が爲のは、其の眞率の威の爲に、却て人が歡迎する。すると己が爲のは、己が爲になり同時に人の爲になり、人の爲のは人の爲にも己が爲にもならないことになる。要は眞が勝つのである。おそろしいものである。嬉しいものである。

### 作句は本能

記録は知識ある人間の本能である。されば作句も本能である。腹が減つて飯を食ふと同じやうに、句を作るべきである。努力ではあるべからざることである。利己の目的などを見詰めて爲すべきことで無い。保元、平治、源平盛衰記、平家物語、竹取物語、あれだけのものを誰か知らん書いてをつた。そして書いた人は



名もわからぬ。名聲を得たいでも何でも無い。唯本能で書いたのだ。紫式部が源氏物語を、どこの本屋からも頼まれず、一文の原稿料も取れないのに、書いた。どうしてもあれだけのものが書きたいので書いたのだ。芭蕉の俳諧亦然り。吾人の俳諧亦然らざるべからず。

## 先生は馬

韓幹は唐代の名畫家である、玄宗皇帝の供奉となつた時、皇帝が韓幹に命じ、陳閔と云ふ畫家を師として、馬の畫を習はせられた。ところが韓幹の畫く馬の畫は、陳閔のとは全く似て居ない。一體これはどうしたものだ、との勅問。幹答へて曰く、「臣自ら師有り、陛下内廐の馬、皆臣の師なり」。皇帝もこれでは詰りやうが無い。頗の髯をひねくりながら、「奇人ぢやな」と被仰つた、とある。枯野の句を作らうとする。類題句集を採つて、作る。これは句集を師とするのである。自分

で、自分の黒い目の玉で、枯野を見て、そして感じた所を句にすれば宜いのだ。馬を畫くには直ちに馬を見よ、枯野を句にするには直ちに枯野を見よ。併しだ。筆の使ひ方を知らずして馬に對したところが、どうすることも出来ぬ。語の使ひ方を知らずして枯野をウロ／＼したところが、どうすることも出来ぬ。唯先生と云ふものは左う云ふ土臺の事だけを教へて呉れるもの、それだけのものと思つて居なくてはならぬ。それだけを知つたら、各に與へられた其の目其の耳其の頭を使つて、自分に韻文でも散文でも思ふ儘にやらねばならぬのである。

## 我身ながらも

橋辨慶の謠に曰く、「如何なる天魔鬼神なりとも面を向くべきやうあらじと我身ながらも物頼もしくて」。深草の元政の辭世に曰く、「深草の元政坊は死なれけり我身ながらもあはれなりけり」。坪内氏作の寒山拾得に曰く、春は籃に早蕨を、秋は



木の實をとりぐくの、此山間の樂みよ、我身ながらに羨まし。自分が黒皮絨の大鏡、大長刀携へて歩く様を客觀して、頼もしい男だ。と自分のことを思ふ。元政が死んだ、あいつも可哀想だ、と自分のことを人事のやうに批評する。優游自適の山の生活、彼等は美しいなあ、と自分の身の上を羨ましがらる。この自分をも客觀すると云ふ態度は、俳諧の特越の一つである。自分をも客觀する、負惜みや瘖我慢や、又自惚など無く、本當に自然に、それが爲し得られるやうになつて、始めて俳諧の第一步を踏み得るのである。

## 暑

暑しとて溜息つくべからず。暑さも趣の一つなるものを。洋服の暑さは洋袴つりの肩のあたりに集り、和服の暑さは兵兒帶の腰のあたりに集る。されば素裸になりて、簾筵に寝そべりたらむ、寝反る毎に、へたと肌はだに粘りつくも快くはあら

す。雷氣空に満ちて日も照らす風動かす、頭壓へらるゝやうなる暑さは、妬婦を妻に持ちたる心地に似たり。片翳無く晴れ渡りて、日の光思切りて強く、生き物の身内の水一滴も餘さず干乾すやう、朝顔の葉、漬けたるが如く、土黄に洩れて龜裂見る日の暑さは、惡氣無き江戸つ兒の疝癪おこして、倭物を殴り仆す勢にも似て、汗を握りつゝも快し。暑さ必ずしも天日のみに因らず、人間の惡暑さこそとりぐなれ。用とても無きに、唯追従の爲に折々訪ひ來て、をかしくも無き事限り無く物語る、我口嚙みてあれば、折から來寄る兒を相手に囁る、暑し。生命保險の勧誘員いと暑し。もとよりさる者と面合はせねど、立關に來て一二分物いふが聞ゆるも暑きなり。通人といふ者いと暑し。鑄茶微塵の堅絹の羽織、薩摩縮の單衣、紫縮緬の絞りの兵兒帶、待合の蒲團に胡坐もせず坐りて、叮嚀に女將と芝居の噂す。喜多村君は河合君はなどいふ、身の毛いよ立ちて暑し。電車にて臭き老婆と隣り合ひたる。すべて婆は爺よりも暑し。政治家といふものと語りたる、實





業家よりも更に暑し。俳諧の宗匠、茶道華道の宗匠、第一流の稱ある藝妓、涼しげにて實は暑しとも暑し。書家の書きたる書の暑さは小説家の書きたる小説よりも暑し。文藝の黨派絶えぬこそ暑けれ。いづれを見ても、世は唯暑くのみなりまざるなり。されば人は暑さを好むと見ゆれど、人工の瀧を構へ、噴水を工夫し、煽風器といふものを發明したるこそ甚しき矛盾なれ。若し清涼を欲するの徒稀にあらば我秘法を傳へむ、曰く禁交際。」

彼

「僕の頭は何時も空虚だ」とよく彼は話す。併しそれは事實で無いやうだ、彼の頭には絶えず何か這入つてる、併し唯一つの物しか這入つて無いのだ。

彼は美術家の所謂文展を覽に行つた、トン／＼と靴音高く中央を眞直に歩いて時々左右を顧るだけ、傍から見ると觀覽に來た人とは見えぬ、併し彼は彫刻の室







で「仙丹」を見附けた。皺の無いスーツとした衣、翩々として風に翻るなどの細工も無い。スーツとした顔、殊に爪の痕のやうな其の目、一言以て評せば「スーツ」と云模様言より外無い。成程その細い指に摘んでるのは仙丹に違ひない。「好い物を見た」と彼は雀躍して歸つた。スーツとした味、それだけを彼は明けても暮れでも味はつてる。他の出品は何も知らぬ。彼の頭は常に唯一物を容れるに足るのみである。

仙丹の前に彼の頭一杯に映つて居たのは音戸の瀬戸の光景であつた。八月の暑い真中、彼は瀬戸内海を見に行つた。瀬戸内海の水、多年彼は其の如何に美しきかを想像して居たが、湯氣の中に居るやうな蒸暑さ、赤禿の多い中國の山、氣の長い汽船、これ等が妨げたか、彼は内海の美に打たれなかつた。春か秋來たら好いかも知れんが、夏の瀬戸内海は耐らぬと思つた。併し彼は船、音戸の瀬戸を過ぐるに至つて非常に強い感興を覺えた。船は市街の全き長さに沿うて進む。日盛



りの家に坐り、臥す、男女、いづれも繕ひ無き姿をして居る。小料理屋の二階に町内の集會らしいのが見える。二三人一間に晝寝して居る中に一人起きて物書いて居る娘が見える。按摩が氷を呑んで居る。岸の石段に子供が集つて竿を振つて何か釣つて居る、それを爺さんが二人後から見て居る。これ程細かに見えるが聲は聞えない。人生を少し距つて見ると唯和氣霽々と見える。この時行手の山の色、海の色、鳥影、脚下に揺めく水、それ等が忽然として懐しい薫を發つやうに覺えた。それが甚しく彼の心を惹いたのである。人間の見えぬ純自然は我味ひ得ず、と彼は思つた。人生は距つて見るべし。現代唾棄すべし、それよりは明治初年が美しく、明治初年よりは江戸が美しく、江戸よりは室町が美しく、室町よりは鎌倉が美しく、鎌倉よりは平安が美しく、平安よりは天平が美しい。天平時代の人生の美しさ、それは天平時代の人よりも數層倍我々は感じ得る。彼はこんな事を思ひつゝ、暫く煮える海の暑さを忘れた。この時の心持を彼は足掛け三月味ひ續けた。

彼の頭に交るゝ充滿する物は極美か極醜であつた。その物の眞體はどうか解らぬが、彼の得る印象は必ず極美か極醜である。かるが故に美に逢へば狂ふが如く醜に逢へば死せむとする。彼は忽ちにして天下の最も幸なる者であり、忽ちにして天下の最も憐なる者である。僕は彼を愛する。嬰兒たりし昔の心を其儘保持して居る彼を愛する。

### 初夏の俳句

五月の俳句の評釋を書けとのこと、俳句の季寄せの五月のところを見ると、いろんな題が豊富にある。併し曆の舊新の差などに據つて見ると、さて眞に今日の五月の題として擧げるべきものは少い。五月雨といつても、今は五月ぢや無い。賀茂の祭も昔こそ五月五日に行はれたが、今は六月五日に行はれてる。と云ふ類を除くと、さて少くなる。爰には全く今五月に屬するものと、必ずしも五月には





限らぬが、この月頃に現はれるべき題の事を評釋することにした。作者は皆明治の人のみである。

新鑛のふき出す山や夏に入る 白 崖

今年は五月七日が立夏である。この日から夏に入るのである。この句、或山から何か新しい鑛物が盛に出る。と云ふその山を、立夏に配合したものである。新鑛のふき出る山と云ふものに、立夏らしい趣を認めて作つた句である。この山は抽象的に考へられてゐる。其の山の姿、色、鑛夫等の往來の様、さう云ふ光景は必ずしも思浮べられぬ。配合、この事のみで此の句は出来てゐる。

蕉門の俳人等が、或は「かけ合」が當流の眼だと云つたり、俳諧は「取り合はせ」ものだと云つたりしてゐる。この「かけ合」「取り合はせ」は今の語に直せば、配合のことである。配合と云ふことは俳諧の一つの傾向ではあらう。併しそれは全部では無からうと思ふ。春雨といへば艶にして濕つた趣の物を配合する。秋雨とい



へば物淋しい趣の物を配合する。それだけでは、詰らぬと思ふ。夏に入るといへば夏に入るらしい趣の物を配合する。それでは詰らぬと思ふ。さういふ趣の物之机の上で考へないで、心を虚にして居て、ふと心を刺戟した物象を捕へると云ふのが俳諧の上乗であらう。こゝに出した句のやうな境界に達するのは一階段ではある。併し何時までも此所に留まつて居るべきでは無い。

門川に流れ藻絶えぬ五月哉 碧 梧 桐

門の前の小川、これを門川といふ、その門川を眺めて居ると、藻が流れて来る、又流れて来る。昨日も流れて居た、けふも流れて居る、と云ふのである。門川に藻が絶えず流れる、と云ふ景に、五月の趣を認めたのである。流れ藻と五月と云ふ氣候との關係はどうであるか、さう云ふ事はこの句では説明して居ない。讀者も左う云ふ事に心を向けない。唯この句を読めば五月の稍強くなりたる日ざしに光り流るゝ門川に藻の流れてゐる景をありくと目の前に思ひ浮べる。五月ら



しい趣のものをと故更に探して五月にくつつけたと云ふ句では無い。この味と前の句の味とを比較して味つて見給へ。

この作者は今新傾向と云ふことを鼓吹して居られる。俳諧の黨派と云ふことを考へると、直ぐ碧梧桐と云ふ名が頭に浮ぶ。藝術に黨派と云ふものはあり得へからざる事である。我は何々黨なり何々派なりと云ふことを呼ばるゝ藝術家があるならば、其人は眞の藝術家では無い。小説壇に自然派と云ふ名が新しかつた頃、この派と云ふことに就て獨歩と手紙を往復したことがある。獨歩の手紙に曰く、お説の通り僕も我黨我派等は面白く思ひません、全體僕は主義がきらひです。上等は上等、面白いものは面白い、それに餘り理由や抑々を附けたくない。

是だあらゆる藝術家は黨派なんてことを全く忘れてゐなくてはダメだ。慰みに藝術を、たとへば俳句でもやつて見ると云ふ青年等も、何々黨に加はらうといふ存念で取掛つてはいけない。



引きおろす三筋の鯉や風やまず

子規

端午は今陽暦でやるから、動かぬ所の五月の季題で五月季題中、主要なるものである。夕方になつて鯉を下さうとする。段々綱を繰る、鯉が段々下りて来る、風が強く吹いて、鯉は低く來ながら、なほ風を孕んで勢ひ込んで居る。言ひ難き趣を言ひ現はして居る。この句の生命は實に「風止まず」の語にある。「引きおろす三筋の鯉や」までは平凡である。「風止まず」に至つて、全句潑刺として活きた。かう云ふ所をよく味ふべしである。生命たる語は上の方におくよりは下の方におくのが面白くなる。

たゞ「三筋」と云ふことはどうであらう。私はどうも不必要のやうに思ふ。鯉を下ろす時風止まず、と云ふだけの趣で澤山である。その鯉が三筋なるが故に別に趣を増すとは私には思はれぬ。

立てくし幟の果てや安房上總

天葩





まづ凌雲閣かなんか、高樓に登つて見はらした景である。見渡せば、五月幟がすうつと立てならんでゐる、遠くく、見やれば小さくく幟が見える。その果てはたい蒼く、森の色、土の色、空の色、茫として、あそこらは安房上總であらうと思ひやつたのである。豪快な句である。

菖蒲葺く女のうしろ姿かな

硯

墨

端午に、屋根に菖蒲を置いて、邪氣を拂ふ咒にする。今は昔ほど一般には行はれぬが、稀に見受ける。東京でもこれをやる家が随分ある。いつか東京の或る裏通り、ブリキを張つた屋根に菖蒲の葺いてあるのを見たそれをよく記憶してゐる。ブリキ屋根と云ふものは、今の東京の蕪雑な様子を代表したやうなものだ。殺風景極まるものである。そこへ菖蒲葺くと云ふ古風な趣あることがしてあるが、何とも云へぬ趣あらしめた。不調和だとか、調和とか云ふに及ばぬ。調和して面白いものもあるが、又不調和故に面白いこともある。

この句は女が菖蒲を葺いてるそのうしろ姿を面白しと見たゞけの句である。「うしろ姿かな」とのみ云つて其のうしろ姿が艶であるとも滑稽であるとも何とも批評を加へてない。加へてあつては平凡だ。加へてないから面白い。菖蒲は大抵男が葺くもの、それを女が葺くと云ふだけでも面白い事柄である。軒に梯子をかけてちと危い仕事をする、それを女がやつてる、それだけでも面白い。それに特に「うしろ姿かな」と断つたので、ありくくとその危げな體の曲りやうなども讀む者をして自由に描かしめる。この自由に描かしめる所が、批評を加へてない爲の結果である。斯う云ふのも俳句の一體である。蕪村の「白蓮を切らむとぞ思ふ僧のさま」に似た句柄である。

灯のさして菖蒲かたよる湯舟かな

鳴

雪

菖蒲湯の句である。「菖蒲かたよる」とは、湯の流れの工合で、菖蒲が片一方へ寄つて漂つてるを云つたのである。菖蒲かたよると云ふ其様だけでも可なり面白



いのであるが、それが夜で、其の菖蒲湯に灯影がさして、と云ふので、味が深く  
なつた。灯がさしたから菖蒲が片よつた、など、句を読み慣れぬ人は思ふことが  
あるが、左うで無い。灯がさして、菖蒲がかたよつてる、と云ふことを一つに  
纏めただけの「て」である。「菖蒲かたよる湯舟かな」はまだ企て易い。「灯のさし  
て」に至つては老巧の人で無くては置き難い文字である。

苗賣の苗に霧吹く木蔭かな

無 黄

花が名残無く散つて仕舞つて、日比谷の躑躅、龜戸の藤、それも盛り過ぎたと  
思ふ頃、苗賣が来る。其の賣り聲、「あさー がをーのーなえーやー、ゆうー  
ーがをーのなえエ、ふじーまめーいんーぎーん、なすーのーなえ」などの類。  
東京に居る人は誰でも知つてるが、地方の人は知るまいから、一寸一例を書いて  
置く。非常に透つた聲で、母音を美しく引きながら苗の種類を呼び歩く。この聲  
を聞くと、夏そのものが来たやうな氣がする。そして其の賣り聲に魅せられては、

引込まれるやうな心持がして、何となく涙ぐまれる程である。苗賣の聲は垣根ぎ  
の山の手で聞くが最も宜しい。

苗賣と云ふ季題はもと無かつた。是非これは季に入れるべきものである。明治  
句集を見る、無黄子の句が二つ載つてただけである。こゝに擧げた句と、そして  
「世の中をへちま苗賣る男かな」とである。私はどうも「世の中をへちま」など云ふ  
剽軽な趣を苗賣に認めることは出来ぬ。これは人の心々であらう。

この句は苗賣が、一寸木蔭に休んで、賣物の苗に水を吹いてる所を描いたので  
ある。苗賣を吟じた句が稀だから、私は爰に自分の句を臆面も無く出しておく。曰  
く「苗賣や西片町の雨上り」その賣聲の韻を描いた積りである。どうであらうか。

門内の梅の若葉や貸家札 紫 影

若葉も當月のものとして宜いでせう。梅の若葉は櫻の咲く頃にもう始めてます  
が、五月はじめ頃には完全に其色なり光澤なりを發揮するでせう。





空家を見た時の印象である。貸家札が貼つてある。一寸宜さうな家だなと見ると、門内の梅の樹が美しく若葉してゐるのが見える。如何にも其小景がよく寫されてる。貸家の庭に柳が垂れてるとか、秋雨が降つてるとか云ふやうなことは言ひ舊されてゐるが、梅の若葉とは如何にも面白い。何となく好もしい可愛らしい、住心地の宜さうな家が想像される。

葉櫻に祇園の名妓老いにけり 不 憂

葉櫻や眉毛落せし茶屋女 秋 芳

葉櫻の雫したる床儿かな 樂 天

葉櫻や筏を上る雨の人 冷 劍

葉櫻とは櫻の花が散つて若葉になつたのを云ふ。ここに擧げた四句中、前二句と後二句とは全く違つた種類のものである。これを比較して見よう。

第一の句は祇園に名だゝる妓が今は年老いて、もはや容色も衰へ、世にも忘れ



られて居る、そして矢張り祇園に住んで居るのであらう。折しも花は葉櫻になつて仕舞つた。其の葉櫻と老名妓とを配合したのである。前にも云つた通り、所謂配合と云ふことだけを遣つた句だ。櫻花は艶麗なるもの、それが過ぎて葉になつた。祇園の名妓は艶麗なるもの、それが過ぎて老女になつた。この類似したる二つの物を列べたわけのことである。

第二の句は、茶屋女の中に、夫でも持つてか古風に眉毛を落したのが居る。その女が葉櫻の下に腰をかけて客でも呼んで居るのであらう。茶屋女といへばこれも可なり艶なものである。それが眉毛を落して稍盛過ぎた見えがある。恰も櫻子が青い葉櫻になつたのと似て居る。この類似したる二つの物を列べたわけのことである。

要するにこの二句の如きは、たゞ似た趣のものを取合はせたと云ふだけの事である。尤もこの取合せと云ふことも初心のうちにはなかくうまく出来ぬ。熟練



すると、春風といへば、直ぐ春風に似つかはしい趣のものが思ひ浮ぶ。五月雨といへば、直ぐ五月雨に似つかはしい趣のものが思ひ浮ぶ。其の際この第一第二のやうな句が澤山出来る。併しこんな取合はせのみに止まつて居ては仕方が無いのである。

さて第三の句は如何。雨上りであらう。葉櫻から雫がたれてゐる。木蔭にある床几にそれが落ちて居る、そこを描いたのである。わびしいやうな、さつぱりしたやうな趣である。この句に描いた景は判然と讀者の頭に浮ぶ。公園なんかによくある景色だと誰も思ふ。葉櫻そのものが眞面目に描かれてある。雫や床几は考へて持つて来たものではない。葉櫻の雫が床几にしたたる離すべからざる一つの纏つた景趣である。

第四の句は、隅田川あたりの景色か。川岸に葉櫻が青い。雨が降つて居る。川を流して来た筏から、蓑笠の人が今岸に上らうとして居る。可なり複雑な景がよ

く巧に描いてある。そして雨も筏も人も皆葉櫻そのもの、趣を助けて居る。葉櫻がすべてを統括して居る。面白い句だ。

第三第四の句はどれも簡單な取り合はせの句では無い。眞景を其儘描いたと云ふ句である。そして葉櫻そのもの、趣をよく顯はした句である。第一第二の句と比すると、ずつと優れて居る。(明治四十四年五月)

### 炎暑の俳句

今月は暑さの盛りである。暑い時には大瀧の軸を懸けるか、或は雪中山水の額を掲げて、せめてもの暑さを忘れむとするが普通の人情である。人實際の炎暑に苦しむの時、涼、寒の句を説かむともせず、却て炎暑の句を説く、暑さに暑さを重ねしめむと欲するかと云人もあらう。我は思ふ、暑に在つて暑を忘れむと焦せるは愚である。卑怯である。暑に在らば暑を味へ、樂に在つて樂に酔ひ、苦に在つて



苦に惑ふは低し。樂に在らば樂を味ひ、苦に在らば苦を味ふ、是れ俳境の人なり。暑に在つて暑を味ふを得ば其人已に俳境の人なり。暑を味ふは暑を我より下に見るなり。即ち暑に克てるなり。避暑は弱者の事なり、我黨は克暑せざるべからず。我が爰に炎暑の俳句十を選んで説くもの、讀む人をして暑を味はしめ、即ち暑に克たしめむとするに外ならぬ。

炎天に照らさるゝ蝶の光かな

太 祇

この句の趣はキラ／＼／＼である。暑い盛り、森羅萬象燃え盡さむとする日盛りに蝶が一疋飛んでるのを見附けた。蝶の光澤ある羽が日に照つてキラ／＼／＼と目を射る。このキラ／＼／＼の趣を「光」といふ字で纏めた。句材をばら／＼に取りはなして見れば美しさうである。而うして其の趣は暑き不快なる刺戟である。「石も木も眼に光る暑さ哉 支考」、「炎天に光る満都の薨哉 霞山」の如きも暑いものゝ目に來る刺戟を寫したのであるが、其の光は動かざる光でノベツである。

この蝶の光は動くのでキラ／＼／＼と光が斷續する、そこが面白いのだ。「炎天の浪の光りや目に痛き 觀魚」も同じキラ／＼／＼であるが、これは目に痛きと刺戟を明白に云つて了つた。しかしこの光りは蝶の光どころで無く光の強さが非常であるから、これだけ云つて了つても、厭味にならぬのである。

炎天に藥干したる 蕙かな 活 堂

草根木皮である。漢法醫の家のあたりか、生藥屋のあたりである。草根の怪しく曲つたのや、木皮の刻まれて黄ばんだのなどが蕙の上に干しならべてある。すべてが炎天に照らされてる。奇しき臭が高く立つ、蠅が飛ぶ。

暑さうな家が建ちたる 明地かな 麥 人

十七字の詩を綴る。日本に人は五萬十萬もあらうか、そのうち頭角を出して、所謂知名の俳人も百か二百あらう。しかも眞の俳人、少くも私が眞の俳人と思ふ人は、茅花にすればさても少し。知名の俳人には才の俳人が多い。才の句は低き





句である。明治第一の大俳人と稱せられて居る子規は故人であるが、今も十人の子規を得ることは左して難くもなからう。今後には於ても同様であらう。然れども五人の麥人を得ることは難い。私は唯爰に斯う云つて置く。諸君の多くは恐らく肯しまい、しかし瓊音が斯く云つたと云ふ事を記憶に止めて置き給へ、十年の後に於て成程と思ふ人が諸君のうちに五人か六人あるであらうと信ずる。私は傲慢なことと云ふ奴と思ひ給ふも、どうかすると無茶苦茶に人を賞めちぎる癖がある男と思ひ給ふも御隨意、私は信ずる所を云ふのみである。この句は東京の場末あたりでよく見る景である。明地のどん真中に新しく家が建つた。夏の日が節だらけの板壁を直射して居る。東西南北皆廣く地が明いてゐて、短い夏草と匏屑がごちやくとあるだけ、木立も全く無い。見え坊な小小説家が、今度貰つた細君の僅な持參金で建てた家でもあらうか。かういふ目前の平凡なものを何でも句にするのが麥人である。麥人は考へて句を作らぬ。机の上で句を作らぬ。私は麥人を羨む。

道ばたに撫子咲きの雲の峰 士 朗

句意は説明せずとも解つてゐるであらう。田舎の道ばた、或は山路かも知れない。雑草に交つて撫子が赤く咲いてゐる。日はカンカン照りつけて居る。振仰ぐと、片栗の粉を千丈の高さに積上げたやうな雲の峰が、頭を壓して懸つて居る。繪に描くと紙の上端まで一杯に大きな雲の峰を描き、下に點々と紅の撫子をあしらつたいけのものである。大きくして物凄なもの、小さく優しいものと結びつけたのである。そして其間に耐ふべからざる暑さを包んで居る。

水かけて見たきものなり雲の峰 素 丸

雲の峰、あれにザブリと水をぶつかけたらどんなものだらう、といったのだ。出来ぬ相談をしたものだ、下らぬことをいつたものだ、など云ふ人があらう。俳味の一部は確に稚味である。愚味である。タワイもない所に一種の俳味が輝く





ものである。「白魚や目まで白魚目は黒魚 鬼貫」これを字でいへば實に小學一年生の清書である。しかしその幼い中に、何ともいへぬ有難味が跳つてゐる。その鼻先にぶらさがつてゐる知慧を棄てよ。赤子に歸り、阿呆になつて、それから本當の俳句が出来るのである。

草暑しもぎ散らしある蟹の足

雲

桂

海岸近き草原であらう、日が照りつけて居る小草の間に、子供のいたづらか、蟹の足をもぎ散らしてある。残酷な不快な景である。快感のみを句にすべきでない。不快感も句にすべきである。この作者は決してこんな景を、面白いと見て句にしたものではない、唯忠實なる描寫である。讀む者が、暑い厭な感を起すなら、この句の目的は達せられたのである。斯う云ふ不快感、暑さとか、梅雨とか、其の主題が已に不快なもの、句によく現はれる。「負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉 園女」の類である。併し私は主題快きもの、句に不快感を歌ふことも有るべきも

のと思ふ。私の知人が或時「若草の上に置きたりペンキ罐」といふ句を示した。あまりいゝ句では無いが、こんなことはよく見る景である。没趣味な殺風景な趣である。作者もペンキ罐が若草に置いてあることを、嬉しく思つて歌つたのでは無い。唯忠實なる描寫である。而して快き主題若草の句に斯る不快感を描いたのが珍しいと思つた。

暑苦しく亂れ心地や雷を聞く

子

規

複雑なことをよく云ひおぼせた。今これを新傾向でやらうもんなら、大變な物が出来上るであらう。句の描く所は、蒸暑くて耐らぬ感である。午後になつてムーンと暑くなつて來た。天の一方に黒雲重く、段々とそれが廣がつて、先づ頭上に黄ばんだ薄雲が張られる、空氣の壓力が非常に加はる、頭が壓へ附けられるやうである。迎も落着いて本も讀めず、物も書けぬ、何だか氣が違ひさうである。横になつて見てもダメだ、坐つても居れぬ。この時遠雷がゴーツと底響して聞えて



来る、夕立ゆふだちが来るなら、手ツ取り早く来ればよいと思つてもなか／＼来ぬ。この趣である。夏の不快ふたけな感を一束にしたる如き句である。

晝顔あつに熱き雨降る 磧かほかな 無 黄

よい句である。捕とらへ難き所を捕へたものである。照りつけられた磧、その磧には小石の上に大きな石が磊々として所々にあつて、一簇づゝ草が生えて、横を向いて色の荒んだ晝顔あつが咲いてゐる。その花には砂埃りがかゝつて居る。空には薄い雲が蓋したやうに蔓つて、日の光が蒸すやうに、物の陰は地に無い。そのうちバラツ／＼と雨が降つては止み、又降る。かういふ光景である。「熱き雨」の語置き得て妙である。

何と今日の暑さはと石の塵を吹く 鬼 貫

面白い句では無いか。豪宕な句では無いか。海を詠じ、雲を歌ふのみが豪宕では無い。傍若無人、俳道を濶歩するの人にして、始めてこの句を成すことが出来るのである。

るのである。言ふ意は夏の夕方、「何と今日の暑さは」と太い聲で人に語りつゝ、庭前の石にでも腰かけむと、石上の塵を吹いたところである。客観ぢや、主観ぢや、そんな境は通り越して居る。どちらでも可なりぢや。私はこの「何と今日の暑さは」で、鬼貫の聲を聞く如く感ずる。石の塵を吹くも實に可いでは無いか。この石はまだ熱を有つて居る。

満月に暑さのさめぬ 壘たみかな 一 茶

暑い夏の日あつは暮れた、灯の無い端の部屋に行くと、恰も十五夜と見えて、満月が木の間に懸かつて、壘たみの上に松の影といふ有様である。涼しげではあるが、晝の暑さが残つて、壘たみが未だほてつて居る。このほてつてる壘を見附けた所はまだ普通であるが、満月の光のもとなる暑さ壘と云のが非凡である。一茶が今生きたら、私はいくら叱られても弟子になりたかつた。時時、先生を有つてる人を羨しく思ふ。(明治四十四年八月)



## 自句自註

遊ばぬを叱りに蛇の來りけり

セツ／＼と一生懸命になつて仕事をして居る。その窓のそばへブーン／＼と蛇が憤つたやうな聲で來た。よい天氣だ、百花争ひ咲くと云春の上日和だ、こんな日は大抵の人は思ひ／＼に遊びに出かけるのであらうと思つた。更に思ふ。自分はこの上天氣を知らん顔して勉強して居る。一寸考へると、いかにも感心なことやうだが、間違つてる。こんなよい天氣には遊ぶのが自然だ。少くも天意に適つたものであらう。勉強したい時には勉強する。勉強したくない時には休む。花でも咲いたら、花見に出かける。月がよければ、月見に出かける。さうして行くのが極めて自然な生活であらう。自分はそれが出來ぬ境遇だ。否それが出來ぬ性分だ。これが間違ひでは無からうか。故久米幹文先生は第一高等學校で教鞭を執

つて居られた。先生或日教室に入つて講義を始めようとせられた時、恰も窓外の櫻が風に亂されて、ハラ／＼と散るのが見えた。先生は暫くこれを見て居られたが、頓て學生に對つて曰く。もう櫻も今日見ねば散つて仕舞ふ、日和もよい、こんな日に本の講義をするでも無い聞くでも無い、これから散らぬ間に花を買しにお出でなさい、今日の講義は休みにしますと云つて教室を去られた。趣味深き美談として今も向ヶ岡の語り草になつて居る。この心持を人間は持つて居たいものである。私が秋晴水の如き日新聞社に在つて、こんな日に仕事をして居る者は不徳だ、敗徳だ、我々は今罪を犯しつゝあるのだ、と云やうなことを云つた。同人は奇語を弄すると云つて笑つた。この心持を私は起して、あゝこの蛇は、この私の天意に戻る行ひを叱りに來たのだな、と斯う感じたのである。

戯作者の晝寝見て行く蝶々かな

京傳とか三馬とか云昔の戯作者、肖像で見ても、又自著の草紙の繪に自分を現



はしたのを見て、悪くいへばダラシない、よく云へばノンビリした様子で、別に人生の意義がどうちやの、など云考は無く、唯洒落に著作をして居る。春の日など眠い時には机の上にうたゝ寝をするか、仰むけに寝てしまふか、強ひてやると云ふやうな事はしないであらう、そこへ蝶々が来て又飛んで行つた、と云光景を想像して見たのです。

砂糖溶けて覆盆子の紅の曇り哉

許六は、句を作るには題を箱に入れて、其の箱の上に立つて作れ、と教へた。成程それも宜いであらう。併し箱の中にもぐり込んで作るのも、何も悪いことでは無い。箱の上に立つて作ると、つい例の取合と云ふことばかりするやうになる。たとへば覆盆子の句を作るのに、それを食ふ美人の顔を見たり、それを盛つた器を賞したり、なんかする。それよりも一心にむきひら見ずに、覆盆子を見詰めて句にすると云ふ事も宜いでは無いか。一方から云へばその方が覆盆子に忠實なもので無からうか、この心持で作つて見た句の一つであります。

風鈴の雨戸を打つて憂き夜かな

何か物淋しいやうな氣分の暮つた夜の心持をあらはした積り、雨戸を締めきつた夜更、風が立つて風鈴が戸に吹きつけられて、コトン／＼と音がする。チリンチリンの音もせぬでは無いが、コトン／＼に氣壓されて居る。床に居てなほ夢を結ばず、このコトン／＼を聞かされて居る。この句を恨戀のやうに解されては、句主大迷惑。

西瓜太郎躍り出でよと割つてけり

大分古い作です。西瓜を力を籠めて打割る勢を寫した積りです。昔々の爺婆が桃を割つたら桃太郎が出た此西瓜から西瓜太郎でも出よやい、と云趣。檀林の句にも面白いのがあると思つて居る時に作つた句だから、瓦西行だの、蚤の都だの、卯の國等に倣つた氣味があるやうです。



## 後の月霧の在明となりけり

作つた時には別に何とも思はなかつた。たゞ斯う淋しく寒く心細く明けかゝる光景を寫した積りであるが、駄句だと思つて居た。所が俳友野梅さんが来て、私の發句帳をひねくつて居られて、この句を發見して、これはいゝ句だといはれた。それから自分で読みかへして見ると、成程よいやうな心持がする。自らの作を人にいはれて始めて良いと氣のつくことは、よくある。だから自分で作つたものは、自分に氣にいらなくとも決して棄てゝはならぬ。自分がいけないと思つてるもの、價を他人が發見して呉れることがあるから。

## 冬日和水無き手水鉢に蠅

これは冬のよい天氣に、厠に入つて出て手を洗はうとすると、手水鉢は空で、底に俳人の所謂冬の蠅なるものが居る。「すぎ、水が無いぞ」と疳癩聲を振り立てることを忘れて、暫くこれに見入つた。冬の暖みと云ふものを、よく願したもの

と見てこの句を作つた。田村松魚君がこの句を賞めて呉れた。僕は君の句をあまり知りもせず、知つてるのにも左して感服したのも無かつたが、この句はいゝ句だ。随分いゝ句だ、といつて賞めて呉れた。

## 兩國川開

藏前の風士、知人を船に招きて川開の奇觀を観る。我も亦賓客の一人たり。船中盃を敷き、卓を据ゑ、輕便電燈を設へ、美酒佳肴林の如し。薄暮纜を太郎稻荷の社頭に解き、迂曲大川に出で、兩國に近く碇を投ず、見よや夕映の黄は淡れて藍深く暮れ行く空に、照り初むる星は紫の燈の如く、岸に船に輝き出づる燈は紅の星に似たるを、逸興禁せず、宴を開けば、煙戯も方に闌なり。或は丹蛇星を吐き、或は銀華雪に散り、忽にして火の樓閣を築き、忽にして炎の車輪を旋らす。豪快窮りなし。誰か酔はざらむや、誰か吟詠を恣にせざらむや。





俳話小品 しる椿

六二

揚花火源平藤橋と開きけり 五丈原

川開き花火に似たる戀もあり 同

寶石の函打碎く花火かな 瓊音

愚なる花火空にしを字を引きすつる 同

星の空星の川星の花火哉 同

### 新秋なる哉

秋になると眼球が内へ向いて開くやうな心持ちがする。春から夏へかけて眼は外にのみ向つて開き、稍もすると散漫に陥る傾きがある。殊に夏はそれが烈しくバツとする。ところが秋になると心が吾れに返る。回想とか、前に讀んだ本等の印象を繰反す働きが強くなつて、一體に情が細やかに動く。どんな小さいものでも興味が湧くといふ心持になる。古人も讀書の好季節だと言つてゐるが、美し



い同情の念が起るのも秋である。いつの季候でも初めの頃は面白いもので、春のはじめ、夏の未だ浅い頃、とり／＼に宜いが、殊に秋、秋のはじめは季候の始の面白味の中でも殊に沁々と嬉しく感ぜられる。

文月や陰を感ずる蛸の中 其角

此の句は所謂眼球が内へ向いた趣の句で、爽かには見えぬが、心に秋の氣を感じた想ひが現はれてゐる。

張貫の猫に見えけり今朝の秋 芭蕉

一見奇を弄したやうで、然らず。此の句に就いては昔の俳人もいろいろ議論をして居るが、張貫の猫の顔に秋の來た氣配が見ゆるといふ、小さな物にもさういふ事を見附けたのが、所謂秋の趣である。秋は悲しいものと定まつたやうに言はれて居るのに、同意は出來ないが、兎に角それは心の細やかに動くことを廓大した言では無いかと思ふ。

新秋なる哉

六三



秋晴の趣は實に何とも言へない。

秋の空尾上の杉に離れたり 其 角

山があつて、杉があつて、其の杉がハッキリとして、其の上に秋天水の如く澄渡つてゐる様は、たまらない景色である。恐ろしい夏の雲が優しい形になる事は秋の空の著しい徴候である。秋らしい雲が淨かんで、下の方には風も無いが、上を吹く風に、ちぎれ雲が透徹つた空を飛んでゐる所は何とも言へない。楫取魚彦の歌に、

秋風の吹渡りたる大空に

走る雲あればたゆたふ雲あり

この後へ附けては恐縮であるが、

今朝の秋面白さうに雲が飛ぶ

と言ふ句を詠んだ事がある。句は拙いかも知れんが、自分には此の事柄が非常に



面白く思へる。尤も前に春があり、夏があり、そして秋になるので、興味も一層深いのであらうが、其の邊の鹽梅は實によく出来てゐると思ふ。

そして日の色の違ふことも著しく、氣が澄んでゐるので、秋晴の日に障子を開放して讀書してゐると空の色が映つて、本の上が青く見える事がある。かういふ日に、遠く廣い所を眺めると、自分は恍惚として了ふ。水溜りのほとりに赤蜻蛉飛ぶ雨後の秋も嬉しい。

富士山は春以來霞んだり雲が多かつたりして見えなかつたのが、秋になると判然として見えて来る。

によつぱりと秋の空なる富士の山 鬼 貫

路傍に敷いた小石の上に、櫻の葉の黄ばんだのが一ひら二ひら散つてる、秋だなど躍上る程自分は嬉しく思ふ。櫻の葉が最も早く黄ばむやうに思ふ。

秋は草花がいろくんと咲く。萩も好い、雁來紅も好いが、自分は殊に水引草を







面白く思ふ。稀まれにある白いのよりも、細くて赤あかいのが、秋晴の庭や徑こみちに點々と朱を點じたやうに咲さいてゐるのが秋らしい。

水引のすい／＼路を塞ふさぎけり

かういつたことがある。鳳仙花ほうせんくわはいけない。此の花の咲く庭にはには、定めてダリアも咲き、コスモスも咲くことであらう。

木では木犀、これは秋といふもの、一方の趣味を奈何によく發揮はつきして居るか。東京には殊ことに多いやうで、暑中休暇過ぎて、町の往來わうらいが舊のやうに調つて、涼しくなる頃ころには、かりそめの夜歩よあゆきに、ふと木犀の匂におひに逢着する事がある。貴族的の匂である。戀こひといふものに匂におひがあつたら、あゝいふ匂におひだらう、と或人の言つた事がある。

秋更けて、菊咲き、月明かな頃は兎に角、新秋しんしゅうの趣は中秋と違つて、味へる丈のあらゆる材料ざいりょうが天地に満ちたやうな時である。眼に見る森羅萬象しんらばんしやう、何を見ても

面白いのに、人靜る折には、勿體なくも蟲むしまで鳴く。

茶立蟲友の戀こひしき夜なりけり

朝 酒

恍くわうとして過去を忘れ當來を忘れてゐる。紗の垂帳のれんが風を孕んで揺ぐ。それには千鳥を描いて浪と水玉みづたまを金糸で縫つてある。この模様もようが、東京を離れた、現代を離れた世界せかいたることをよく示してゐる。自分が舞臺の人であるやうな心持もする。女は俯向うつむき勝ちで、時々ひそやかに笑ふ。朝飯の膳が運ばれた。朱塗しゆたうの平の蓋ひらをあけると、鰻うなぎの強い香が立つて、その肉の壁積かた毎まいに、なほ沸々と脂の玉を噴く。吸物には蓴菜もろこの寂びた縁ゆかりが浮ぶ。風は通るけれど、空氣が重く澱おこんで、雷の近きを覺える。言少なゝ女なんなである。僕も何も云はぬ。不平ふへいも無い、又満足も無い。昨日東より百里を経てこゝに來り、今日又五十里を西に去らむとする。





別離、それさへ心に微動びどうとも與へぬ。西も東も無い。會も離も無い。たゞ渾然こんぜんとして世は一つである。我はこの心持こころもちを女に話さうとしたが止める。口を開けば、必ずこの心持こころもちの外の事をいふ。そして其言の響が、裏反つておのれの心持を攪亂して仕舞ふ、それを恐れながらである。唯黙々として一合の酒を酌交しやくかうはす。紗の垂帳のれんが風を孕んで搖ゆぎに搖ゆぐ。

博徒

博徒が博奕に負けて、蒲團ふとんに括くまつて晝寢して居る。其心持を想像まうぞうして見た。残念だつたとは思つて居る、併し失つた金は、勞力らうりきを以て得た金では無いから、其残念さは、餘程よほど淡い。そして又今度うんと儲けて遣ると云希望がある。その希望も、それに向つて驀進まうしんする努力を期待せぬから、これも淡い。唯この五尺の體を全然運命うんめいの手に任せ切つて、寢て居るのだ。美しい心持がした。

浄土か

T君と共に食堂車しょくどうくるまに入る、誰も他に客が無い。ウエーターは僕等を見るや、向う正面の振子ひねこを捻る。天井の煽風器忽ち活きて、涼風渦りやうふううずを卷く。各三品ほど命じて、麥酒を抜かせた。二組ほど客が入つて、ブツと向うに陣取ぢんとる。電燈がバツと點いた。薔薇ばらを織り出した白い窓懸まどかけ、窓と窓の間に設へた花棚はなだに簾はだか込んだ小花瓶こはなびんに、溢るゝばかりの蝦夷菊えぞぎく、室の前後に仕組んだ姿見すがたみ、彼方の棚に列んでる洋酒壺やうしゆの種々それ等が一時にバツと輝く。汽車は今、愛知川の鐵橋てつきうを渡つた。琵琶湖の入江が川のやうに見えて來る。こんもりした低い山が淡墨色たんすゐいろに列んで居る。

夕暮れ始むる江州の山

と云短句が浮む。緑鮮かなサラダが煽風器せんふうきに煽られて卓に散飛らむとするを、フオークで鎮して暫くT君と麥酒を酌交しやくかうはす。



此時ふと向うの姿見に映つて自分の姿を見た。ハンチング、それと同じ色のサックコート、如何にも旅慣れた敏活な紳士に見える。顔は微醺に輝いて總ての筋肉が張切る健康に耐へずして、蠢くかと思ふ。この姿を紫色の煙草の煙が包まむとしては散り、包まむとしては散る。僕はこの時ほど活気ある自分の姿を見たことは近來に無い。いつも何物にか追はれつゝ、何物かを追ひつゝある、切迫した苦悶の姿を見たのであるが、暫く日課を解脱した自分は斯くまで和平に且つ積極的である。足到る所に必ず逢着する山河と戀愛とは、一切の苦悶を掃清した。雲一朵、落日の光を逆に受けて、金色に燃えたのが、手に取るばかり近く見える。是れ浄土か、是れ果して穢土か。

## 生活の二部

自分の讀みたい物を讀み、自分の書きたい物を書いてる。自分はこれならば大

幸福であるが、他から報酬の金を受けることは出来ぬ。金を得ねば死んで仕舞はねばならぬ。死んでは讀むことも書くことも出来ぬ。他の爲に勞して遣れば他は金を呉れる、惜まず呉れる。それで生きて行かれる。併し他の爲にのみ勞して居ては、自分の幸福は全く零になる。それならば息は通つて居ても、生き甲斐と云ものが無い、死んでると同然だ。自分のみ幸ならむとしても死ぬ、他にのみ幸を與へても死ぬ。こりや如何したら宜いであらう。

純と云ことは娑婆では望まれぬ。生活の一部を他の爲にし一部を自分の爲にするより外に致方は無いのだ。他の一部の量の多い程暮しは樂になる。自分の一部の量の多い程自分は満足し、うまく行けば自分を不死にすることも出来る。その量の選定は各個人の随意である。といふと甚く自由のやうに聞えるが、こゝに非常な煩悶があるのである。純は望まれぬ、斯う云つて其煩悶を抑へて行くより外は無い。



外 套

S君に遠方へ使に行つて貰ふ時、外套を貸した。S君は三日程それを返さぬ。僕は寒い夜更に歸る時無論外套は着て居たが、あの外套があつたら、こんな晩には外套の重ね着をするのだから、と思つた。妻に催促を命ず。まあ宜いぢやありませんか、そのうちお返しなさるでせう、餘り此方がせましく見えて變ですからと云つた。S君は借り物を質に入れたりなんかする人では斷じて無い。僕はS君を自分の體の分れたものゝやうに思つてる。僕が死んだら、僕の趣味は獨りS君に依つて傳へられ、廓大せられる、と信じて居る。僕はよく自分の臨終の光景を想像して見る。僕が小學時代から記し續けた日記、それには可なり豊富なろくろの材料がある、それをS君の手に渡して死ぬ、と云事を想像する。それ程に思つてるS君であるのに。

翌晩も歸宅は十二時頃であつた。寒かつた。それ程に思つてるS君が、恰も仇敵のやうに思へる。我が重ね着して居る外套を引剝いた敵と思へる。耐らん、乃公は何者の爲にも犠牲になることは出来んのだ。

翌朝電報を打つて催促をした。S君は直に外套を着て返しに来て、歸りには寒さうに懷手して歸つた。

どうして犠牲と云事が僕には耐へられんのかなあと思つた。どうかすると、ふとした出来心で、他の爲に事をする事が無いでも無い。併し必ず後で非常に後悔をする。取りかへしの附かぬ悪事をしたやうに感ずる。

我と云ふものを擴張して、必ず此五體のみを我と思はず、自他の差別をも忘れて、洋々たる春の海のやうな心持で居る人、さういふ人の心は穩なものであらう。僕はそれを羨しく思ふ。僕とてもさうなる時が屹度來ると思つてる。しかし自分がしようと思つてる事が大體出来て仕舞つた後に來ると思ふのである。それまで





は僕は絶えず、我執の炎に燃えて居る。形容で無く實際自分がこの炎の熱みを感じるやうに思つて居る。

### 煽風器

ふと目を覺ます。煽風器が唸つてゐる。まつ暗だ。右も左も正しく女だ。蒸るゝが如き脂粉の氣が澱んでゐて、闇に色を溶かしたやうに感ずる。風はこちらへは來ないが、煽風器が唸り續けてゐる。寝つく迄は随分皆騒いだ。もう物を云はないで寝ると約束をしてからも、「く、く、く」と云綻びるやうな女の笑が屢聞えてゐたが、今は流石に六人の女ども皆疲れて、よく寝てゐる。穩な寢息が、煽風器に紛れず聞える。煽風器の唸りには高低がある。電氣の流れに叢があると見え、時々物凄いやうな烈しい響になる。眞赤な焔が天地を籠めて、それが渦を巻いてゐる、その中に炭の如く焦げた亡者が渦に巻かれて幾人も旋轉してゐる。子供



の時に或寺で見た地獄變相の圖が闇に浮む。ふと又煽風器が奴隷であつて、眼の圓い、唇の赤い、齒の眞白な黒奴であつて、主人の爲に烈しい勞働をしてゐる。主人が女等と戯れて、戯れ疲れて寝た、それを眼前に見せつけられながら、命の儘、朝まで手足を休めず激動してゐる。眼は血走り、深い皺が鼻の上に刻まれ、裸體の全身に汗を噴いて、肉が爛れ盡すかと思はれる。

「ウー、ウー、ウー」物凄くて耐らぬ。僕は床を這ひ出て、手探りに床の間に寄つて、煽風器の柄を旋らした。幽かな紫の光を發つて、「フー、フー」と弱まつて仕舞に「サラ、サラ、サラ」といつて、左も器械らしく音無くなつた。安心してもとの床に入らうとする。聴覺の變化に眠りを淺くしたか、隣の女は寢反り打つて柔い腕を僕の胸に落した。

### 女



煽つて呉れる團扇の風を背に受けつゝ、長い煙管で香の好い煙草を喫みつゝ、何となく中庭を見下してゐる。低い春日燈籠の頭、花の着きかけた百日紅の一本。午前の日光は斜にこの二階の欄干と庭に射してゐる。俄に階下がさゞめく。「皆が歸つて來ました」と背後の女がいふ。「暑かつた」「おう暑かつた」といふ聲々、燈籠の向ふの縁側へ女十人ほど立ち亂れ、金盥、手水盥に水湛へて、争うて衣を脱して汗を拭く。男に馴れた女の肌、心を刺すやうな縮緬の紅、鬘、足、背、乳、顔腕、織るが如くに紛糾して、妖艶の氣霧の如く天地を籠むる。時々バツと光るは脂粉の溶けた水を捨てる光。沓脱石に撥ねた飛沫に刹那の虹が咲く。

あゝ女、女の低きものたる、我よく是を知る。女の淺きものたる、我よく是を知る。女に自發の趣味無き、我よく是を知る。女に自我無く眞摯無き、我よく是を知る。しかも女を離れて我は何物に對しても眞に心の顫動を覺えることが出來ぬ。女を離れては我れ極めて狹量なる醜き人間である。あゝ我れ迷へる者か、墮

獄の徒か。西鶴曰く「色より至道に入るこそ誠の道なれ」と。是れ魔言であるか、或は聖語であらうか。

朝

安藝の國は本郷驛で汽車を下りた。下りたのは僕獨りだ。午前六時、空氣が澄み渡つてる。停車場には一人の客も無い、唯一面に大坂新聞がひろげてあつて、歩くことも出來ぬ程。今新聞が着いたのを、汚い若者と老人が頻りに一枚々々折つて居る。東京でも、苦學生らしいのが一寸した明地を利用して、夕刊を地に置いて折つてるのをよく見受けるが、こゝのは非常に緩慢だ。そして人が込合ふべき停車場の土間に一杯にひろげてやつてるのが腹の立つ程呑氣だ。折れた一部分を老人は棒の兩端に縛り付けて、昔の飛脚と云形で出かけて行つた。車といふものが影も無い、起きてる家は一軒も無い。これから川下まで行くのだが殆ど方



法がつかぬ。汗臭い寝衣着た爺さんが子供を抱いて、とぼくと来た。僕の姿を見て、「お車かな」と云つた。この爺さんが車夫の家を起して呉れて、その車夫が支度をゆつくりとして車を持つて来る迄、僕は爺さんと肩を並べて突立つてゐた。一寸この間に爺さんと巧に言を交へて、土地の風習や何かを聞取るなど、いふことが僕にはどうしても出来ぬ。黙りこくつて棒のやうに唯立つてるのだ。さしも停車場を占領して居た新聞もやつと片が附いた頃、車が来た。乗込むと臂が奈落に陥り膝天に朝す、乗心地の悪い奴だ。コトリくと進む。何はともあれ空気が實に好い。

東天に蟠れる黒雲が朝日に燦つて、異業を燃したやうな色になる。本郷橋、境橋など云橋を通る。魚籠を頭に戴いた女が来る。白蓮咲けり。燕亂飛す。小山が際限無く列んでゐる。中國の形はこれかと思ふ。小川の岸に月草がゆらぐ。朝草刈る女あり。牛多し、牛皆露けき草を食む。尾を巻いた純日本犬が吠えずして車の

横に走る、坂を上り、坂を下り、又坂を上り、九十九折の路を迂り、二時間を經て峠から川下の景を瞰下し得た。夏霞の瀬戸内海、玩具のやうに往來する汽船、唯是れ動く繪にして、物の響は、わが乗る車の外に無い。静寂に飽きた、平和に飽きたと云手紙を寄越したS子はあそこに住んでゐるのか、と強く思つた。

### 蘆雪の山姥

嚴島、詰らんくと云ことはかねて聞いてゐたが、成程詰らぬと思つた。併し蘆雪の山姥は深く印象された。山姥の顔は、あまり凄みを露はし過ぎてゐて合蕃が無いが、其の衣裳が、非常に贅澤なものであるのが、幾年の風雨に曝された趣を、よく現はして居る。模様は彩色、その一色にも必ずこの趣を含ませてゐる。衣裳の輪廓及び皺、右肩にかゝつた大きな破笠、これを極めて奔放な筆で、たとへば醉墨雲龍を描くやうな勢で書きなぐつてある。その線と緻密な衣裳の模様及



び全體の落着いた彩色とが希なる調和を成してゐる。小心と放膽の調和である。相反したる二致を和するは靈腕を要する。

光琳の四季の屏風のうち春の屏風を、美術學校の美術祭の時に見たことを記憶してゐる。春の草木、その箇々が純然たる寫生である。そして其輪廓、總ての配置は純然たる模様式である。寫生と模様式、この相反したる二致が、いかにも麗はしく調和されてゐた。山姥のこの不思議なる調和に對して、彼の調和を回想した。肩にかゝつた破笠の筆意と、衣裳の殊に腰のあたりの模様の筆意とは、同一紙中に存し難かるべきものである。

金太郎は山姥の衣の裾を踏まへて、籠り登らむとする勢をなして居る。この金太郎の顔は山姥の顔よりは遙に面白い。殊に右の頬のひどく出張つてゐる不自然な形が、理窟なしに面白い。目の着けやう、口の歪んだ様子、うす氣味悪き笑ひ、そして勿論子供らしい趣もある笑ひ、金太郎と云怪兒がよく現はれてゐる。其肌膚の

赤い色も、珊瑚でも使つたやうな、小氣味のよい色である。嚴島詣での印象は唯この蘆雪の山姥であつた。

あ わ 雪

雪駄みたり。垣の竹は湯に洗はれたる如く、その棕櫚繩の結び目毎にのみ一握づゝの雪纏へり、そも見る／＼轉がり落つ。半咲きたる木瓜の花びらに、枝の岐に、露滴れり。遠く眺めやれば、例の太郎兵衛山の木の間に淡暗く見ゆる積雪、その上のあたりに灰色に見ゆる梅、小石川の家々の雪も、瓦の繼ぎ合ひはや明かにて、解け易き春の雪の特徴あり。空は銀の光澤消しのやうに曇り渡りたれど、西の空一劃明く照りて、眠き茜色したる、含める趣ゆたかなり。茜の一部漸く剥けて濕へる緑の色生れ來る。そのあたり煤の如き片雲頻りに北を指して飛ぶ。豆腐屋の喇叭聞ゆ、青き煙所々に立つ。わが窓の庇より落ち續きし點滴いつしか絶えたり。



臍の光

帝國劇場の評判は非常なもの、尤もそれは劇場の構造の評判である。まづ歐洲の大都にある劇場にも遙にこれに優ると云程のは無い、佛蘭西のグランドオペラでも、これが少し大規模になつた位のものだ、との事。芝居は詰らんと云聲も聞かれる、雁次郎一人だけ宜いとも云。役者がどうであらうが、脚本がどうであらうが、構はん、唯帝國劇場が立派だくと云凄まじい評判である。行つて見た。大理石を惜し氣もなく使つてある。女案内員いづれも可なり美しいが、背いが低くていかぬ。今後募集する時には背のすらりと高いと云事を一條件としたら可からう。斯う云建築には殊にそれで無くては調和せぬ。男の接待員青の燕尾服に赤チヨッキ頭を漆のやうに分けた奴これは甚しい。場に入ると耐らなく盛麗に撃たれる。純金の光澤を消した様な光と真紅の襪せて深みを生じた色とが錯雜紛糾して

痛快に刺戟する。天井の真ん中に玻璃の巨きな臍の様な物が凸起して居てそれが燦然と光つてる。燈を包んでるのだ。天女の繪も好い、源氏香の模様も好い、貴賓席の上の白鴿の彫刻も頗る好い、垂幕の天平少女の模様頗る宜しい。天井の天女の繪に松や富士を見せたのはいかい、それは雲ばかりにして、全く天女の空に飛ぶを下から仰いだやうに繪いたものだけにしたかつた。席の通路をもう少し廣くしたい箇所がある、これは國技館も同じ缺點を有してゐる。奏樂はまだ拙い。愈劇が始まる。「頼朝」は宜しく「政子」と改題すべし、政子と云女を力を入れて現はして頼朝の偉人らしい所を見せる注意を怠つた。政子はあんな女であつたらうと思はれるが、親を輕んずる傾向のあるのは不快だ。頼朝は實際刹那々に情熱の極度に達する人であつたかも知れぬが、女に惚れられて頭を下げて忝ながるのほちと馬鹿々々しくなる、あれア頼太郎だと云つた人がある。梅幸近頃瘠せた、政子に色氣の乏しいのも其の爲だ、牛肉でも食つて肥るべし。仕草は可なりよく演つてる、





芝翫と云ふところだが、政子には彼より此の方が却てよいかも知れぬ。頼朝の高麗藏、これも脚本通りには演つてる、折々悪落がするのは脚本の罪だ。政子の兼隆に嫁ぐと聞いての煩悶、もう少し偉人らしく出来ぬものか。芳三郎先生の兼隆は、装束だけ古代でも何だか今の齒科醫のやうに見えた。その悠々乎たる足取りまことにはや威儀堂々たるもので御座る。女優なるものは仕方の無いものだと言事をしみじく覚えしめた。中幕の伊賀越、上方者が見窄らしい道具を背にして所謂芝居をする。その事が根本的に帝國劇場とは不調和だ。雁次郎と云者を天下の名優と心得て居る者がある、憐れむべし、彼は大阪の名優である、天下の名優では断じて無い。彼は絶えず見物と云ふものをのみ対象として芝居をしてゐる、ダメだ。斯う云つたら雁はそれでは何を対象としたら宜いかと目を丸くするであらう、ハ、ハ、ハ、吹法を扇であふいで得意がつてる。何の愚状ぞ。大切の羽衣、背景極めて拙い。もつとすつと光琳風かなんかにして仕舞へばい、浪が死のや

うに見えるぢや無いか。高麗藏の踊はいつも乍ら巧い。常磐津松尾太夫の聲はいつものながら好い。梅幸の天女。踊りに一寸いゝ形がある。宙づり御苦勞様なことだが、何とか身を斜にして胸は高く足は低く釣る工夫は無いかしら。舞臺一面大空になる所の背景は油繪でいきたかつた。歸つて考へて見ると、劇の印象は極めて朦朧たるもので、臍の光だけが赫奕として頭に残つて居る。

恍 たり

初冬なり、今朝ははや靄美し。太郎兵衛山の端を遠く彼方に去つて、孔雀の尾を展げたるやうなる大銀杏、及び其より更に遙か、大塚あたりかと覺ゆるほとりに見ゆる、箒の如き銀杏、この二本の銀杏、我が書齋の眺めの最優れたるものなり、寧ろ富士よりも優れたり。朝日の光漸く強く、靄薄らぎ行く。孔雀銀杏の飽くまで濃き黄色、粘りある重みあるやうに覺ゆる其の色を、つくづく麗はしと見





遣る。鶯銀杏はなほ霧に隔てられて影のやうなり。つくづく美しと見るうち、孔雀銀杏を横きりて、銀の如き鳥一團飛ぶ。鳩なり。右へ行きしと見れば又左に旋る。その翼の日に真向になる時銀と輝くなり。銀杏の黄金愈榮ゆ。銀杏の下に寺の屋根見ゆ。極めて静なる朝なり。鳩なほ飛びなほ旋る。恍たり。

餘 裕

女たちも皆酔つた。

「農商務省特許局、日本銀行國庫局、と三度續けて云へますか」

「農商務省トットトチヨク」

「だめく」

「農商務省、特許局、日本銀行キヨツキヨキヨク」

「一度が云へないぢやありませんか、だめく、貴郎云へて」

僕は腹を抱へて笑つた。誰がそんな事を考へつくのだらう。明治時代に餘裕が無いなんて思つてたのは誤だつたかも知れぬ。馬鹿々々しい人が馬鹿々々しい事をドシ／＼考へて呉れて、忙がしい人間を時々笑はせて呉れるのは有難いと思つた。

順 風 耳

暖爐のまはりには透視の議論に花が咲いた。必ずしも隠れたる物の形を見ると云で無く、聞えざる遠さにある物の響を聞くと云事も出来る筈である、と云論が出た。

机の上に麥酒會社のコップがあつた。何々ビールと云文字が腐蝕させてある。如月は他の話を黙然と聞きながら、髭を捻つてこのコップを見詰めて居た。頓てポケットから鉛筆を出して其のコップをチン／＼と叩いては考へて居たが、「解る



解る」と突然云つた。

「何だ、何してるんだ」と二三の者が如月に問ひ寄る。

「僕はねえ」と如月は真摯な落着いた調子で云つた。「僕は非常に聴覚が発達して  
るんだ。茶碗を打つ音を聞くだけで、茶碗の縁を打つのか、底を打つのか、ま  
中の所を打つのか、或は内面を打つのか、大抵當てるのが出来る。勿論十中十ま  
では當らぬが、先づ十中八度までは當てる。よく僕はこれを行つて人を驚かした  
もんさ。ところでこのコップだがね、このコップの字の所を打つ音と、字で無い  
所を打つ音も、確に聞き當てるのが出来る。これア透視に匹敵するやうな超自  
然の働きちや無い。たい微細な差まで聞き分けると云までのことさ。」

「一寸君打つて見給へ」と一人が如月に云ふ。如月はコップの字の所をチン／＼  
と打つて、又字で無い所をチン／＼と打つて、莞爾して、「解るかね」と云ふ。「解  
らん、同じ音だ、これが當れば奇妙だ。」

物に興じ易い得山は椅子を離れた。此奴は面白い、僕が叩いて見るから、當て  
て見給へ」とコップと鉛筆を取つた。

「君、こゝで背後向きになつて試つても宜いけれど、それでは興味が無い。この  
部屋の外へ出て叩いて呉れ給へ」と如月が注文する。

「よし来た」と得山は扉の外へ飛出して、「宜いかね」と聲を懸けた。

一同は固唾を呑んだ。煙草喫む者も暫く煙草を忘れた。

「十度の中二度位は外れるかも知れないが、大抵は當る。さア打ち給へ」と如月  
は片腕を机に突いてその掌で頬を支へて、顔を斜にして、瞑目した。其の態度は  
全身の神経を悉く双耳に集めたやうに見える。

チン、

一つ音がした。

「たつた一つちや解らん、少し繰反して呉れ給へ」



「さうか、チンくくくく」  
「そんなに早く打つても無効だよ、もつと緩り、チン、チン、チンと或る時間を距  
て、レギュラーに十ほど打つて呉れ給へ」

得山は命の儘に規則正しく打ち始めた。

チン、チン、チン、チン、チン、チン、

「出ませんよ」と如月は叫んで笑ひこけた。誰も彼も腹の皮の裂ける程笑つて、  
硝子窓がピクピクといふやうな騒の中へ、コップと鉛筆を両手に持った得山は眞  
赤になつて躍込んだ。

### 宗因の句

菜の花や一本咲きし松の下

これは宗因の句なり。面白き寫生の句なり。檀林の大將宗因にこの句あり。面白

き哉。

### 厭なもの

凡そ厭なもの、舊劇の子役の白、銅像、東京市吏、風流がる老人、趣味がる若  
者、小さき城下なりし町の民、客にビスケットを出す主人、歸り際に座蒲團を二  
つに折るを禮と心得たる客、酒のみ呑む酒呑み、江戸ッ兒中の粘着性ある一種、  
交際といふもの、子煩悩なる男。

### 折 句

三圍の雨は豊かの折句なり

と云川柳、柳梅五編に出づ。「折句なり」と云のが一つの流行なりし時代あり。成  
る程「夕立や田をみめぐりの神ならば」の五七五の頭字を拾ひ讀めば「ゆたか」な

宗因の句 厭なもの 折句



り。卑しきうがちにて笑ふにも足らず。然るに馬琴「かの句はもとユタカといふ折句なり、ひそかに豊作の意を以て祝したらむ」との説を吐きしこと奇跡考に見ゆ。馬琴、變な人なり。

### 中家小家の作

中家小家の作品を見れば、世はかはりたり我は時勢に遅れたりとの感を起す。大家の作を見る。なに矢張り同じ世なり、大道千古たり。

### 作者の佛

中川德基翁と語る。嘗て露伴先生所持、今令弟成友氏に譲られたる三馬の用ひし机、の話出づ。翁曰く「昔は行燈を机の前に置いたものだから、机の幅が狭く出来て居ます」と。齧結ひたる作者、行燈を向うに置き、其の朧ろげなる光の下

に筆を行る、其の光景明らかに眼前に現はれ、なつかしきやうなる心地したり。

### 再び讀め

少年時代に讀みたる書なりとて、再び讀まざるは大に損なり。斯くの如くならば、寧ろ少年時代に何者も讀まざるが可し。少年時代に讀まれたる書のうちには必ず意味深き書あるものあり。壯にして再び讀むべし。三度讀むべし。良書は年を経て讀むに従つて愈得る所多くなるものなり。

### 巧なる會話

秋の彼岸の日なり。電車にて、上品なる老翁と老婆と、相知れるが乗合で語るを聞く。話は三十分程續きたり。而して其の内容は、あなたは何寺へ參詣に行き給ふか、我は何寺に赴く、近頃は好天氣よく續く、時々朝など雲重なり、降るか



と思ふ折あれど、やがて晴れ行くなり。唯これだけの簡單なる事を、老婆は上品にして練磨されたる語もて、豊富に多趣味に、抑揚美はしく、時々目立たぬ身振りし、笑ひ、などして語れり。我はこの會話の巧技に感じて三十分を聴惚れ、悠々たる和平の氣の身を包むを覺えたり。今もその感を忘れず。

### 曇 天

十二月半ば過ぎの晝、曇りたり。赤きインキかゝりたる硝子を、なま拭ひに拭ひたる如き、濕ひたる淡き紅の色、大空に廣く漲りたり。銀座通りの並木の柳、老婆の髪かみの如く靜に垂れたり。何々大安賣おほやすうりなど書きたる大旗、濡れたるが如く垂れたり。人は頻しきりに往き來る。電車自動車馬車荷車自轉車人車縦横擦違じゆうわうすりちがひに走す。而して天地は極めて靜寂たり。斯る景を君感きみかんじたること無きか。

### 編輯室の閃感

新聞社の編輯室へんしゅうしつに在る時、一閃の感我を襲へり。この中、自己の意志によつて働さつゝある者幾人かある。この感襲ふや、我は覺えず室の全部を見渡したり。人、屍しの如し。寂寥、肌はだに粟せむとす。

### 人間の目

電車内にて一心に讀書す。兩眼は前に捧げたる書中に注がる。しかも隣席の人書を窺ふ無禮むれいを見得て、心動く。人間の目は廣く見え過ぐるなり。

### 筒 性

誰も知つてゐる諺であるが、馬ありこれを一人にて水邊すゐへんに導くことを得れども、



十人にてこれに水を飲ましむること能はず、といふ西諺は痛快なる哉。飲むま  
いと思へば頑として飲まぬ。この事人間の社交上には處世上には頗る不便利であ  
る。しかし爰に活きた簡性がある。頓て活きた社會があり、活きた國家があるの  
である。

### 膾炙されるもの

警見大魚躍波間

太白當船明似月

山陽の詩は、馬鹿々々しく淺薄だ。頭にガン／＼響くばかりで、心に響かぬ。  
遂に是れ劍舞の詩である。一體人口に膾炙する詩歌には、頭へガンと來るのが多  
い。奥深いものは少ないやうである。

敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花

パツとしてるだけである。一寸思ひ附きの比喩であるのみである。この歌によ

つて維新の志士が尊王心を暗示されたといふのは本當か知らん。本當ならば、志  
士の心の状態、當時の社會心理状態が非常に感じ易くなつてた爲であらう。歌の  
力の強さの證明にはならぬ。

古池や蛙飛込む水の音

俳諧の歴史上、芭蕉が未開拓の境に目を着けたと云ことから、この句は重んず  
べきであるが、今見れば大した句では無い。そして「飛込む」といふ語が非常に厭  
味である。唯古池といつて更には「水の音」と平氣で云つた所が荒彫で面白い  
といへば云はれよう。

膾炙される其の事は、名譽では無い。たとひ一人でも、其人の心に響くものを  
作らば、文人の誇として宜いのである。

### 流 露

膾炙されるもの 流 露



大和は國のまほろば、たゞなつく青垣山、籠れる大和し美はし

これは日本武尊が病重き時に詠み給うた歌である。郷里を戀ひ給ふ御心も左ることながら、その調に、如何にも重病らしい所が現はれてる。昔の人は、技巧と云ことを殆ど知らなかつた。たゞ自然の流露是れ歌であつた。歌のみならず總ての文藝は必ずこの自然の流露で無くてはいけぬ。古今を通じてのことだ。昔だけが左うであつたと云過去の話では無いのである。

### 英雄も數字

これを思ふ故に骨は南山の苔に埋むとも魂魄は常に北關の天を望まむと思ふ、若し命を背き義を輕んぜば、君は繼體の君に非ず、臣は忠烈の臣に非ずと詔ひて、左の御手に法華經の五卷を持たせ給ひ、右の御手には御劍を握りて、いざよひの月と共に雲がくれ給ひぬ。

後醍醐天皇御臨終の様を太平記には斯く記した何といふ力のある文であらう。千載の下なほ南朝の爲に奮ひ起きむと云心を發さしめる。斯う云刺戟的な文は印象が極めて明らかである。併し、普通教科書などに記すやうな歴史だけ讀んで居ては、大體の筋には通するけれども、理性のみの印象に止まつて、情の印象が更に無い。學生は教科書によりて唯冷たい歴史事實のみを知る。これではダメだ。教科書を読むと共に、太平記なり源平盛衰記なり平家なり、左う云慰みかたぐ讀めるものだけでも讀む必要がある。もとく左う云物語風のものには眞を失つてゐる個所もあらうが、併しそこに色彩がある、光輝がある、そこが尊い。教科書では清盛も義經も、數字の如く現はれてる。物語に描かれてるのは生きて居る。

### 途中作

西村茂樹先生の途中作と云題の詩が或家に掲げてあつたのを見た。



葉落冬山寒

水枯野橋堆

人影長三丈

夕陽照車背

さつぱりとして佳い詩と思つた。眼前の平凡な景を叙したのみで、冬の夕暮、腕車に乗つてゴト／＼と田舎道を行く心持にならせる。又五言である事もこの趣をよく助けて居ると思つた。

### 雪花雲月

欲取<sub>テ</sub>舊稿<sub>ヲ</sub>示<sub>シ</sub>諸君<sub>ニ</sub>

舊稿風吹<sub>テ</sub>飛<sub>レ</sub>作<sub>ル</sub>雲

君去<sub>テ</sub>試看<sub>ヨ</sub>京洛<sub>上</sub>

雪花雲月皆我<sub>ガ</sub>文

斯う云詩、心に印して忘れず。藝術に凝りに凝りたる末は、遂に一指を動かさずして、雪花雲月、たゞそれに對して默然たらむとする氣味あらずや。惜しい哉、作者の名を忘る。

### 古道人の詩

風筵露席若爲情

額上微波怕月明

一笑倒囊郎既去

佳人袖裏有錢聲

夜鷹が笑を賣つたあとの情景なり。醜陋なるべき情景なるを、何といふ妙技ぞ額上微波怕月明に量り無き涙あり。結句の錢聲、さらりと言ひ放つて、言ひ難き感を人に與ふ。作者は古道人總生寛といふ人なり。

### 紙 燭

徳山、龍潭の許に在て夜に抵る。潭、大分更けたよ、もう歸つたらどうぢや。山、然らば御暇と籠を掲げて出でむとす。外は眞の闇、これあ眞暗だ、困りましたな。それでは、と潭紙燭を點して與へむとす。山受取らむとす。途端、フツ、



潭吹き消したり。山忽然として悟る。紙燭は主義なり。理想なり、方針なり、標準なり、而して書籍なり、師匠なり、智識なり、と我は思ふ。

### 陶刻の引札

赤鯉に乗り祠に來り、水を畫して路を成し、或は石を羊とし、或は紙を金とす、奇は則ち奇なりと雖些の雅致ある無し。我かるが故に仙人道士を好まず。佐藤如仙翁其名に仙字あり、他人亦呼んで仙人と稱ふ。しかも霞を餐はずして飯を食ひ、日を嘯ますして茶を啜り、彼のだらしなき居士衣道服の類を纏はずして黒木綿の紋附羽織、袴しやんと結びて、唯刀を揮ひ陶に刻するを樂みとす。其様を見るに縦横自在達筆の人の墨を白箋に漲して漠々雲烟を生せしむるが如し。此術寔に奇にして且つ雅致深し。遙に琴高吳猛の徒の、漫りに、奇を耳旨とする仙術に勝りて懐かしからずや。

翁は元福山の藩士、老いて攝津の夢野に閑居す。この間自ら陶器を作り、これに字を刻する事を工夫し、八年にして始めて法を得たり。斯くて四十年の春東上して、澁谷の里に庵を構へ、霞動かぬ春の日永をも倦まず、釣瓶落しの秋の日ざしを惜み、六疊の座敷に胡坐して陶刻に餘念なし。其音こつくと絶間あらぬに、庵のあたりに遊ぶ童ども、先づこつくとの仙人様とぞ稱へ始めける。こつくとのみ地藏切る町と云ふ古き句も思はれてをかし。

此頃始めて廢病院成れり、翁こゝに通ひてこの技を廢兵に授く。これより如仙翁の名四方に聞えて陶刻を需むる者頻りなるを、うるさしとてや京を立出で、暫く煙霞に身を隠しけるが、四十一年の秋櫻の葉赤らむ頃、流石に都戀しく、再び廢病院の師となり、兼ねて舊福山藩領學生の寄宿舎なる誠之舎の監督となりけり。扱教を授けつる廢兵は皆が其の技長じぬ。學生の監督自ら他に人ある可し。我は老年の身の獨立の氣散じなるを選び、専ら陶刻を生業として餘生を養はむと



思ひ成りぬるは去歳の暮なりき。則ち職兩つながら辭して、新に居を向島寺島村に卜し、これよりは快く江湖の需めに應じ、園遊會などの招きをも諾ひて、興ある紀念物造らむとぞ云ふ。強ひて自らのみを高くして世を厭ふ事鬼を避くるが如きは、未だ眞の道を得たるに非ず。翁今自ら楽しむ所の技を以て弘く世を楽しましめむとするは、彼のうるさしとて京を出でけるよりは、歩を道に進めたるものにして、翁の爲世の爲慶ぶべき事といひつべし。

爰に翁を天下の雅客に紹介し、其妙技を愛でむ人の愈多からむ事を祈る者は、瑣々庵の主人沼波瓊音なり。

## 唯没頭せよ

或人がいつた、吾人は明治に生れたからと言うて、必ずしも此の明治時代を知らなければならぬといふ責任は無い、日本に生れたとて必ずしも日本を知らな

ればならぬと云責任は無いと。これは極端な言ではあるが、意の在る所は没頭の奨励にあるのである。明治時代に生れながら、遠く奈良朝に遊んで、山上憶良と語り、額田女王と語り、奈良朝に生活して一生を終つても宜い。平安朝に遊んで久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るを眺め、或は朧月夜を如くものぞ無きと感ずる、艶麗の極致、縹渺の域に入つた、雰圍氣に包まれて、一生を暮しても決して悪くない。明治時代の人でありながら、奈良朝、平安朝時代の文學のみ知つて、紅葉を知らず、露伴を知らず、緑雨を知らず、獨歩を知らなくても耻でも何でも無い。

見渡せ、我々が眼下には様々な世界が存在してゐる。奈良朝、平安朝、室町、徳川、或は神代、それらの世界は決して過去のものではない。今もそらそこに現存してゐる。なほ横に見れば支那、印度、伊太利、佛蘭西といふやうに様々な世界が散在してゐる。必ずしも萬里の波濤を越えて身體をその名の國に運ばずとも、



その世界は、すぐ身邊にあるのである。佛蘭西の氣を吸ひ、佛蘭西に生活しようが、英吉利の氣を吸ひ、英吉利に生活しようが、それは人間の自由である。

昔儒者が日本の事をあまり知らなかつたのを、國學者が譏つて、彼等が若し支那人に日本の事を聞かれたら何と云うて答へるだらうと言つた。が、それは無理な事で、國は種々な人を要求する。日本人でありながら、支那の事しか知らない人も亦日本國の許容すべき人間である。

時代で無く、國で無く、又そこには、法律、實業、文學等と云世界もある。この世界が錯綜して、吾人の在るこの世に列んで居る。

この何れかの世界に、必ず没頭し給へ、と僕は切に勧める。他の事を知らぬといふ事を、決して氣に掛けるべきで無い。自分が選んだ世界に没頭した人が、必ずエラクなる。どの方面でも、成功者の生涯を見ると、屹度没頭の過去を有つてゐる。所謂時代思潮に動かされたり、流行に衝動されたりして、絶えず受身の態



度を取つてゐる人は、丁度木片が波に漂はされてゐるやうなもので、大丈夫の耻とすべき所である。

我といふものを認めよ。わが好みわが安住する所を得よ。その埒内を深く知り深く味へ。敢て他を見るには及ばぬ。出齒龜といふ語が如何なる意味か知らずとも、耻で無い。五人殺しの犯人が捕まつたか捕まらないか知らずとも、迂でも濶でも何でも無い。唯一心に我が境を極めよ。斯くて年経れば、兩眼豁然として明らかなるを覺ゆる時が来よう。その時は、鋭く明星に照らされた畢婆羅樹下の釋尊である、交際場裡に立交つて、所謂そらさぬ人になる必要は無い。會話の材料の豊富な人を羨む必要は無いのである。

自分が没頭の事實を始めて現前見たのは、高等學校に居た時のものであつた。五島先生といふ理學博士の先生があつた。常に粗服を纏うて實驗室にばかり居られたが、先生は動物の生殖を専門に調べて居られた。鶏卵の鳥になる部分を幾日目





々々と切つて分類して、一種の鉤かんなにかけて、その断面だんめんを顯微鏡で、熱心に見て居られた。其の様子が私に敬虔けいけんの念を起させた。そして此の先生の一年間の授業は悉く動物の生殖せいしよくであつた。恐らく五島先生は一生を動物生殖だけで暮さるゝであらう。大政治家が一國を料理すると此の事と、孰方どちらが廣ひろいとも大きいともいへぬ。故栗田寛先生は自分の家から大學へ行く迄の道より外の道まを知らなかつたといふ。これは何も強ひて知らずに過すこされたのでは無い。全く自家の研究の爲に、外の道を知る餘暇よかが無かつたのである。

芳賀博士が嘗て某書ほんしよに序して、「此の書は限ある人生じんせいに於て讀むべきものゝ一つである」といふ意味の語を書かれた。此の言は私に深い感を與あたへた。人間が短い一生で何も彼も、いろんな方面に向つて走る事は、絶對ぜつたいに不可能である。どれか其の一を選んでやるが宜い。徒に漠とした廣ひろい事をボンヤリ知るは無意味むいみである。狭くても一事じを深く知れば、この世に生れた丈の獲物えものを得たのである。

没頭ぼつとう無くして成功した人は、假令一時は輝いても直に滅ほろびて了ふ。没頭時代ありし人の光ひかりは永劫不磨である。

### 不可研究

文學に就ていふのだ。文學は研究の對象にするのが本義ほんぎでは決して無い。ひどく六ヶ敷しいが、實は文學は研究すべきものぢや無いといひたいのだが、さう云ひ切つて仕舞ふと、研究者は全く存在ひつぷの必要が無い、と云事になる。やはり少しは研究者が居ても宜い、居た方が便利だ。少し、少し居れば宜いのだ。所謂研究専門家、いや研究けんきうしきあ能の無い文學者が、作家を見下すやうな態度で居るのが癪さかにさはるのだ。文學といふものは、味ふものだ。味ふべきものだ。これを分析解剖するのは文學者外の仕事しごとに屬するのだ、と云事をよく思込んで貰ひたい。たとへば萬葉集、萬葉にはどれだけ支那の思想が入つて居るか、どれだけ佛教



の思想が入つて居るか、等と云ふことを調べたり、やれ五七の調がどうぢやとか、字のゆて方が何種あるとか、作者が何人あるとか、なんとか解剖的の眼でこれを見て、したり顔で居るのは、文學士などいふ一種の人間によくある。これ等の人が萬葉の味を知つて居ると、話をして見ると、旨味は頓とわかつて居らぬ。歌を讀む、ピンと心の底まで響く、或はポーツと酔ふ。それで歌を詠んだ作者の心と、讀んだ人の心とが、時間に關係せず、幽明に關せず契合したのだ。作者の目的の一部が達せられたのだ。味ふといふことは斯ういふことなのだ。そこに理窟も何も無い。思想の由來など問ふに違あらずだ。この味ふといふ事が出来て、研究もして見ると云心が出て来るなら、それはお暇潰しにやつて見るも宜いさ。遊んでるよりはせめて博奕でもうてと孔子様か誰かいはれたさうだから、博奕よりは何だか上品なやうな氣がする。

味ふと云事が、てんで出来ないで、即ち萬葉と云ものを會得しないで、研究は

かりしてゐては、研究その事も完全に出来ないのだ。會得の上に建設されない研究は、其の研究では無いのだ。即ち研究専門家は、研究の出来ぬ人と云妙な結論に到着する。妙でも何でもしやうが無い。事實だもの。

文科大學は年々非常に骨を折つては、この研究専門家を製造しつゝある。その研究家が、人を教へて研究させる。一體試験の論文が皆この研究で無くては通らぬのだ。僕も大學に居た時、頻りに研究心を挑發された。ついでなされて何か研究しへいかなと思つたり、又本をいくらも展げて見て研究の眞似事をしたこともあつた。詰らぬ事に時を費したものだといふ非常に後悔して居る。文壇の人といふのは文學を創作し得る人のみがそれである。研究者は文壇外の人である筈だ。何だか、話がこんがらがつて、自分でも譯がわからなくなつて仕舞つたが、兎も角諸君だ、諸君若し文學を愛好されるなら、たい虚心になつてこれを味ひ給へ、分析し給ふな、分析眼で見ればかり居ると。一生文學を知らずに終つて了ふ、勿體な



いことだ。劇評家が芝居を見る心持では禍なる哉、たいの見物人になつて見るが可い。

教へられ

何故と問ひ給ふな、それを誰か知らむ、戀ふるも戀ふる故に戀ふるところを聞け  
嫌ふも亦さならむ。

鷗外の「文づかひ」の一句である。深い教訓を僕に與へた所である。好悪に理由無し、思へば平凡なことであるが、稚き時は、こんな事がなかく解らなかつた。我は何故に櫻を好む、美しきが故に、櫻はいづこが美しき、際限無く理窟詰めにして行かうとする。終始論文でも書くやうな頭になつてゐる。併し理窟は理窟として、別に趣味の天地あつて、理窟ではどうしても好くべきで無いものが、非常に好きであつたり、どうしても嫌ふべきで無いものが、非常に嫌ひであつたりする。

そこが人間箇性の面白い所であるが、稚い時はこの理窟で通れぬ界に到つて面喰ふ。我が心を疑ひ出す。この界に到らず、若しくは到つても別に何の刺戟をも感ぜざる人もある。或はこの時に起つた疑を漸く大きく展げて行く人もある、而して儼然として趣味界に理窟を入るべからざるを悟る人もある。斯う悟つた人は、爾後趣味界に遊び得る人である。僕も幸にこの趣味界に踏入つて、今も遊樂して居る。而してこの幸を與へたのは實に「文づかひ」のこの一句であつたのである。書き來ると、其の「文づかひ」を讀んだ當時の背景が浮んで來る。「文づかひ」は誰かの小説と二つ一緒になつた薄い本になつて出たのであつた。僕は大意と云本屋で借りて來て讀んだ。夏の夜であつた。玄關の次の間、藥篋の置いてある前で、疊の上に本をひろげて讀んで居た。戶外には門涼みの人の話聲がしてゐる。僕の坐つて居る近くの板の間の隙から、羽蟻が夜々飛び出した。それを婢が團扇でハタキ撃つて居る。父は今往診から歸つて飯を食つてゐる。斯う書いた所で、讀む人は何



等の感興を得られまい。併し自分には幼い折の我が周囲と云ものが、年を経るに従つて非常に趣味あることを覚えて来る。

郷里、それは今もある。去年も今年も郷里に歸つた。併し今見る郷里は、幼時の郷里とは全く別物になつてゐる。決して外形に就て云ふのでは無い。その感じに於て全く違ふのである。幼時の我は郷里の懐に這入つて居た。今の我は郷里の外にある。身郷里に入るも、なほ郷里は他の都市と同じく、我が體と相對して立つて居る。幼時の郷里、それは現實のものでは無く、空想のものである。美しい夢である。其の如く美しい地は、この世には實在して居なかつた。又居ないのである。

も一つ、これは中學に居た時に、書中の文句で非常に啓發された事がある。學校で「グイカー、オプ、ウエークスフィールド」が教科書になつてた。厚永先生と云のが滔々とこれを譯解されるのを、茫然として聞いて居た。これに併せて「ス

ケッチブック」も教科書に用ひられて居た。「スケッチ」はよく解つたが「グイカー」は頓と解らなかつた。併し其の「グイカー」の中に、實に強く僕を刺戟した文句があつたのである。それは「アナコン、アラカイ、アテルタイヨン、ツー、バン」と云語だ。この語は僕は一生諦んじて居る。語は羅甸で、意味は「世は始も無ければ終も無い」と云のなさうな。所謂無始無終、今でこそ平凡な語のやうに響くが當時の僕には實に聖訓の如くに感ぜられたのである。僕は中學の二年の時に、ゲーキーの地文學を教へられた。其序論の所で、宇宙の無限と云ことを繰返し教へられた以來、無限と云ことが怖い事實となつて僕の頭に迫つた。どうしてこんな宇宙が出来たか、あの大空、それは我が立つてるこの大氣に直接續いて居る。人間の造つた家の中に隠れても、窓から無限は覗く。街路を歩けば、無限は我が頭上に展がつて居る。これを如何せん。僕は心に不斷の不安を抱いた。夜、物干臺に上つて星を仰ぐと、大いなる疑に耐へられぬ氣がした。その感想を時々父に

教へられ



語ると、父は、「お前は氣が違ふぞ」と云はれた。その不安が「アナコン」の咒文ですつかり解けた。無始である。無終である。唯斯くあるのである。其起つた因を考へることは出来ぬ。其成行く終を考へることも出来ぬ。と斯う思つた時、無限は單なる一事實として考へられるやうになつた。云はば疑念を断つた、諦めたと云つた方が宜いかも知れぬ。そして其以後は、宇宙を見物するやうになつた。人生決して微細では無い、人は望遠鏡で天體を觀ると共に、顯微鏡で細胞の世界を見ねばならぬ、と思つたのである。

天 龍 忌

私が朝報社の記者になつたのは四十年の一月一日であつた。つい此頃(四十四年二月廿二日)思ふ所あつて記者の職を辭した。まる四ヶ年餘りになる。この間に私は世の中の事は何事にも表面と裏面とのある事をしみるゝと知つた。今の社會には同

情と云ふものが少しも無い事を感じた。眞摯の態度と云ふものが非常に稀になつた事を感じた。公平と云ふことは到底今の社會には行はれぬと云ふ事を知つた。私の新聞記者生活に於て得た知識は多くは不快な性質の者ばかりであつた。併し唯一つ有難い所得があつた。唯一つだ。それは小林天龍と云人を知り得た事である。もつとも私は天龍を私宅に訪うて物語るなどといふことは一度も無かつた。又そんなに深く交際して打解けた話などもしなかつた。唯社で顔を合せたと云に過ぎなかつた。併し私は天龍の人格を明白に解し得た。私が老の爲に或は病の爲に、記者時代の總ての記憶の無くなると云とがあつても、其社の主要なる位置にある某々氏、日々職に倦まず氣根を盡して編輯をして居られる某々氏、奇異なる其社の銘間取、其建物、新聞其者の總てを忘れて仕舞つても、天龍の音容だけは深く刻されて居るであらうと思ふ。

私は天龍を知らざる人に、如何なる言を以て斯翁を説いて宜いかを知らぬ。翁



は、酒脱の権化であつた。酒豪であつた、好んで色に遊ぶ人であつた。よく人を愛する人であつた。よく人を叱り罵る人であつた。社會の諸方面のことによく通じてる人であつた。そして確乎たる主義趣味を持つてた人である。しかもそれは幾面もあつて、その主義、その趣味の全豹は、容易に他の窺ふを許さざる底のものであつた。思つた事は何でも云人であつた。喜怒哀樂少しの隈も無く色に現れる人であつた。そして翁は漢詩人であつた。「余を傳するに足るものは唯夫れ詩か」とは最後の病床に於ての言であつた。あ、何と云つて宜いであらう。いくら箇條を列べても遂に天龍の人格を其ま、想はせることは難い。

三十九年の暮に、私は入社の人に會ひに行つた。薄暗い應接間で、晝も電燈が點いて居た。蝶二君が今編輯長が来るから挨拶して呉れ給へと云つて室を出て、頓て再びこの室に来ると、直きあとから五十位とも見える、人並外れて大きな頭を二分刈にした、まづ入道と云ふべき人が来た。それが小林

天龍であつたのだ。私は椅子を立つて禮した。天龍は「ヤツ」といつて軽く頭を下げて、「役所にお出だつたさうだが、新聞社は役所と違つてどうもザワ／＼／＼としてますから、暫くはお困りでせうが、なあに直きに慣れやす」、「いや騒々しいことは覺悟してゐますが、どうも餘程鈍な方ですから、新聞のやうな敏活な事業が仕畢せられるか、その點が心配でなりません」、「ハ、ハ、ハ、至極呑氣なものです、誰にだつて出来ます、蝶二君なんざあ、こないだも泥にして且つ酔しやしてね、赤襷をひつかけて、俗に長唄なるものを唸りながら書いてましたが、そんなものですよ、至極呑氣なものでげす」と云かと思ふと突然立つて「萬事、蝶二君から」と云捨て、ふいと出て行かれた。これが初對面であつた。

一月一日黒岩社長に初お目見得と云ので、并町のお屋敷に向つた。途で私の先へ行く車の上に偉大なる山高帽子が見えた。これは天龍だつた。社長の家で落合つた。天龍の話を知くと如何にも春が来たやうに感ぜられる。



社へ初めて出ると、天龍は私を編輯員諸子に一々紹介して呉れた。その晩社の新年宴會に出た。天龍居士大に酔つて、更に家をかへて飲みませうと云つて、私共四五人を誘つた。私は何處までも居士に跟いて行く氣になつて諾した。外は雪が萬字巴と降頻つてる。そして元日の晩のことで車が無い。やつと二三臺持つて来た。「仕方が無い二人づゝ乗らう」と天龍が云つて、私は天龍と押合つて合乗することになつた。車夫は駈出す。天龍は頭ばかりで無く體全體が大きいので、私は細く棒のやうになつて居た。途中で天龍は寢て仕舞つたが、ふつと目を醒まして「忠告する人と欠伸する人は至極宜しい、瓊音君、至極宜しい」と云つた。これは私が入社の際の中に、「忠告する人と欠伸する人とは余の最も嫌ふ所なり」と云事を書いたのを賞めたのであつた。非常に嬉しく思つた。

天龍に接近したのはこの入社第一日が最なるものであつた。

赤毛布の切を机に敷いて編輯して居る天龍の姿は何といふ譯もなく士氣を鼓舞し

た。順序を讀み上げる時に伯林電報を必ず「ペロリン電報」と戯れた其聲が今でも残つてゐる。夜編輯する時などは、寄鍋を取寄せて一杯やり乍らやつてるのを屢々見受けた。天龍が出て居ると、他の總ての人の言も行も不思議に幼稚に見えた。編輯へ入つて来る時、鬨を排して必ず口をへの字なりにして首を一寸振つてズーツと編輯を見渡すところ、頗る劇味に富んで居た。

社長に云々の事を要求したいと誰かが云つた時、天龍は「頃日は御機嫌斜めだから一切ダメでげす」と云つたことを記憶して居る。某氏が西洋から歸つて來ると直ぐ、西洋の話を一切編輯ではならぬと其口を封じて仕舞つたのは天龍だつた。地方の小學校の先生が出火の際御眞影を出さむとして焼死んだことがあつた時、一記者がこれを模範的行爲と賞したのに、別の面に、斯う云事で命を落させるのは悲惨なものであると云意味のことを書いて、會議の席で其不統一の罪を謝したのは天龍であつた。よく天龍は昨日は夫婦喧嘩をしたと其頭末を大きな聲で



物語つた。さうかと思ふと歸り際に「けふの晩飯には尾張の海鼠腸がありやす、細君のお情あるお酌で、勞を慰しやすかな」など云つて去ることもあつた。こんな瑣事にも天龍の洒々落々たる所が遺憾なく現はれてた。その年の暮に天龍病を得て大磯瀆龍館に臥した。私は丁度小冊子を著したから見舞狀にそれを添へて贈つたら次のやうな手紙が來た。

御狀拜見且又御著御惠贈奉深謝候轉地當初は多少無聊の感も有之候へ共愈々塵事一切を抛ち醫師の命を奉ずるの外何事も不致身は存外呑氣のものにて幾分回復の様子相見え申候歟と被存候臥蓐中は一切作詩等不致考なりしを何時と無く五首許り出來仕候

客中無日月

生意動寒梅

神氣頓蘇矣

病魔安在哉

打塵知歲晚

春餅報春回

海水看還穩

溶々送暖來

などは最も實際に御座候御一笑可被下候先は右迄草々頓首

三十日

慶

沼波賢臺侍史

これが天龍から得た最初の最後の手紙であつた。今も筐中に藏して時々出して見る。若々しい筆蹟は其人の和平の性をよく示してゐる。

一月殆一杯私は病氣で社を休んだ。そして二月一日に久し振りで社へ出て見ると、天龍病漸く篤しとの事だ。私は水を浴びたやうな氣がした。見舞に行かうと思つたが、旅費がどうしても出來ぬ。やつと洋菓子を送つて寸志を致した。其の十七日遂に天龍は幽界の人となつて了つた。それから以後、社に在る時間内は一日として天龍居士を思ひ出さぬ日とは無かつた。今度社を辭したに就ても先づ天龍の事を思出す。天龍の法事のある時は萬障繰合せて必ず參詣した。寺は四



谷の西念寺、霜解道に梅のちらほらする頃にいつも執行されるのだ。私は天龍の爲に危きを救はれたとも無い、又非常に愛されたり大して世話になつたことも無い、そして私は天龍を忘れ兼ねるのである。私は自分の發句帳に天龍忌と云ふ季題を置いてゐる。

乙な物來り廻りよや天龍忌

### 行方不明

梅が咲きかけたと云噂を聞く頃であつた。寒い月夜に、突然浦上が僕の下宿を訪れた。僕は喫驚した。

浦上と云のは中學で同窓の友である。三年級までは非常な運動家で、器械體操など實に手に入つたもので、あの何といふか、鐵棒の上に兩足で暫く立つと云離れ業まで遣つて、同級生を驚かした。その頃まだ野球などは流行らなかつたが、

擊劍や柔道は盛にやつて、浦上はその方の名物男になつて居た。これがどういふ動機であつたか、常人でなくては解らぬが、三年級を終へた頃から、頓と運動を遣らなくなつて仕舞つた。そして頻りに國文、殊に古典、古事記風土記萬葉などといふ方面を研究し出した。中學生が萬葉を研究するなどいふと、今の人は信を置かぬかも知れぬが、その當時は——明治二十五年——左して不思議の事でも無かつた。

殊に僕の中學には鈴木先生といふ驚くべき感化力を有つた國語の先生が居て、この人が純國粹主義で、それでなか／＼英語なども出來て、どんなむづかしい國學書でも生徒によく解るやうに講釋する靈力を有つて居た。そしてこの人は生徒を叱する事は校内第一等で、或者は先生を意地悪者といつた、或者は先生を惡魔とまで罵つた。併し學力のある先生だとは誰も信じて、畏敬の念を起して居たのだ。この先生の感化で、當時の我が中學生は誰も歌を詠む術を知つてゐた。中には古



調を喜んでやるのもあつた。斯くいふ小生も「沫雪のほどろくに降りしけば」なんていふ調を真似て盛に歌を詠んで得意でゐたものだ。先生の感化を最も強く受けたのは實に浦上であつた。彼は運動を止めてから學校でも自宅でも古い國典ばかり讀んでゐる。外の課目は一切顧みぬといふ有様、そのいふ所は、我々の逆も手の届かぬ高いことを云ふ。顔などもどことなく學者然として、身にこそ制服を着けて居るけれども、僕等は彼をたい同窓生とは思へなかつた。「大人」といふのが彼の渾名であつた。浦上は學校の學友會雜誌に「萬葉集私義」といふものを連載し始めた。どんなにこの爲に僕は教へられたらう。その作る所の歌は「……うけ沓を脱ぎ棄つる如あらむちふかな」といふやうな調で、それが又ひどく僕に嬉しかつた。

彼が國語以外の學力は急阪を下るが如く下つた。それでも四年級はどうか斯うか終へたが、五年級を終へる時の、即ち卒業試験の際、彼はあまりの不成績の爲

に、成るべくならとの教師の厚情も、起すことを杜絶されて、落第して仕舞つた。なんでも彼の母は泣いて校長の宅に斟酌を乞うたが、彼はこの事を母に聞くや大に怒つて、なせおつ母さんは、そんな事をいひに行つて呉れたか、私はこれを機として學校は廢める積りである、廢學のよい折の出來たのを自分は喜んで居るのに、と云つたさうである。浦上が落第したと云事に就て僕は氣の毒だとは思はなかつた。何だか勇ましいやうな氣がしてならなかつた。其後彼は遂に退學願を出して仕舞つた。浦上が學校へ通ふ事を止めて、専心國文に研鑽したら、一月の間にもどの位進歩するだらうか、と僕は恐ろしいやうな羨しいやうな、嗚呼彼には逆も追ひつけぬかと云ふ残念さや、いろいろな事が思はれて亢奮した。それから暫く會はなかつた。友の噂によると、彼は朝鮮語を學んで、その語から古典を讀んで先人未發の新しい意味を續々發見しつゝある、とのことを聞いた僕は平凡にエツチラ、オツチラと試験に試験を経て大學に入つた。お定りの如く



本郷に下宿して通つて居た。國文の知識は一向に擴がらぬ、獨逸語を少し嚙つたり、論理が少しわかつたり、厭つてりやあ經濟まで無理に教へ込まれて、そんな事に時間を割かれて目的の國語の力が一向につかぬのを齒痒いとも思つて居た。かう云折柄浦上が突然來たのである。僕はまづ忸怩とした。何だか僕が口を開いたら、如何に高等學校や大學を熱罵するだらうと思つた。互に言寡なく挨拶をし了るや、浦上は例の氣味の悪い微笑を浮べて右肩を聳かしながら、

「僕はこんな物を持つて來た」

と嵩高な風呂敷包を僕の前に突出した。

ほうり出した包の中は高さ七八寸の嵩ある原稿であつた。これを僕は檢して唯驚嘆した。古事記大成とも云べきものである。古事記は人も知る日本の至寶である。日本最古の史籍で、開闢史の最趣味あるものがこれに在る。一面からいへば勿論歴史である。一面からいへば詩篇である。徳川時代の國學者はこれを研究し

た。殊にこれに熱中したのは本居宣長で、彼は始めて古事記の全體に訓み方を附けた。如何にも愉快に讀み下せるやうになつた。彼はまた古事記の非常に詳しい註を書いた。夫れに依つて始めて古事記の意味が確定された。夫れが即ち古事記傳だ。人は古事記傳に依つて始めて古事記を知る事ができた。古事記傳以上に古事記を研究する人は未だなかつた。ところが此の浦上の持つて來た原稿は遙かに古事記傳を凌駕してゐた。浦上の眼中には宣長をオーソリチイと見てゐない、古事記傳に信用も置いて居ない、浦上は本居は眞福寺本にかうあるなぞと引用してゐるけれど、實際見てやしない、僕は縣應の許しを受けて、凡べて眞福寺本に當つて見ると宣長の引用して居る所が澤山違つてゐることを發見した、多分聞き書でもしたんだらうと、例の氣味の悪い、意地の悪いせゝら笑ひをして話した。

此の無名の原稿、僕は假りに古事記大成と號づけよう。これは先づ古事記の原文の校合を最完全にした。日本に現存する、五十餘種の古事記を彼は自分の旅費



を投じて、全国に求めて、一字一畫の差をも記した。夫れ丈でも非常な大事業であるのに、彼はまた古事記の字々句々及び事實に就いての註釋、諸家の説を悉皆網羅した。往々自説をも加へてゐる、その自説の個所には火の如き創見、巖の如き自信を見る。僕は浦上は恐ろしい人だと思つた。その瘠せた前屈みの男がどうしてこんな精力を有つてるかと訝んだ。此の七八寸の原稿は未完で、彼は猶此後東京に下宿して、今の國學者の泰斗を歴訪し、充分に増補して大冊子として發表せむとし、其の手蔓を求むる爲に僕を訪うたのである。

僕は夫から毎日のやうに自分の知つてる諸先輩に浦上を紹介して歩いた。芳賀矢一先生、上田萬年先生、坂正臣先生、井上頼圀先生、其他自分の知る限の先輩に紹介して、原稿の一部を諸先生に見せた。芳賀先生はこれは出来上つたら文科大學で出版す可きものだと言はれた。井上頼圀先生は汚い四疊半の部屋に病氣で寢て居られて、鍼醫に鍼を打つて貰つて居られたが、療治が濟んで、此の原稿を

見られるや、蒲團を刎ねのけて起上られたが、非常に結構な物です、と感嘆された。尙先生が記憶に存する四五種の古事記の異本を教へられた。浦上は諸先生の前では餘り口を利かず、首を垂れてゐた。歸り道にはいつも、あの男もあんまり物を知らんなあ、と笑つた。井上先生の教へられた異本はとつくに調べた事も話した。

浦上は其後、圖書館などへ通つて、或は近縣の寺などへ旅行して只管原稿の増補に努力してゐた。彼はあらゆる人を尊敬せぬ、物をあまり言はぬ、宿の者も彼を嫌つた。僕も屢々彼と喧嘩した。僕が怒ると彼は二日ぐらゐ顔を見せぬ、どうしたらうと思つて彼の部屋へ容子を見にゆくと、彼は僕の聲音をすぐ聞つけて、障子をあけてニヤ／＼と笑つて、僕を招く。そして世間話などをつとめて始める。そんな風でいつも和解した。僕が何か心配する事があると、彼は間がな隙がな僕の部屋を訪れて、これでも飲み給へなぞと葡萄酒などを買つて呉れた。



其中、彼は古事記に少し倦きたと見えて、古器物聚集に熱中し出した。埴輪人形と徳川以前の甲冑等を最も好いた。妙な形をした一の冑に數百圓を投ずるを惜しまなかつた。彼は求め得た古器物をすぐ國へ送つた、其中に名古屋に私立の博物館を建てるなどと言つてゐた。古事記を早く出さうぢやないかと言ふと、まだ足りない、一寸氣をぬいて又増補するつもりだと言つてゐた。

或日、彼は「随分金を使つたから少し小遣ひを取り度いなあ」と言つた。間もなく三上博士のお骨折で、彼は史料編纂の雇ひになつた。古器物の聚集また古書の聚集を、彼は盛んにやつた。日露戦争後支那の名刹にあつたと言ふ五寸許りの黄金佛を莫大な金を出して、浦上は買つた。夫からの事である。浦上の容子が變つて來た。史料編纂へ行く道でも、向うへ行つてからでも、どうも探偵が跟つて仕方がない、なぞと言つてゐた。或時などは「此の卓子の下に探偵がある！」と言つて人々を驚かした。眼が釣つて來る、皆が言出して職も廢めさせ、巢鴨の

病院へ入れた。其後、少しよくなつたと言ふので、例の原稿を持つて郷里へ歸つた。

其後の消息を知る者はなかつた。誰にきいて見ても知らぬ。境遇が變つたので僕も彼の消息を知る便がなかつた。夫から東京に定居するやうになつてからも、時折郷里へ歸る事があつても、浦上を訪ふ機會が得られなかつた。郷里へ行つて訊ねたが、彼の家はなくなつて了つて、彼も原稿も妙な形をした冑も黄金佛も、何處へ行つて了つたか判らぬ。誰も知らぬ、彼が生きてゐるか、死んだのか、夫も判らぬ。彼を知つてゐる友人は皆、その安否や原稿がどうなつてゐるかを氣遣つては居るが、忙しい爲に誰一人進んで彼の跡を訊ねようとする者もない。僕はその責任が最も重いものゝやうに思へる。今年古事記が出来てから二千二百年に當るので、大和の多神社で祭がある、それにつけても僕は浦上や原稿の事を強く回想する。一日も早く彼の所在を探出して諸先輩にも助力して頂いて、あの原



稿が公にし度いと始終思つてゐる。(明治四十四年)

斯子

「父ちゃん、恐い月が出てるよ、真赤だ。」

勇は後架から出るなり、父桂一の書齋へ飛込んで斯う云つた。

桂一は友人と話をして居たが、勇が血相かへて突立つてる様子が可笑しいので二人で笑つた。桂一は戸を開けて見た。成程恐いやうな月だ、正しく真上が缺けて、色は黄よりも朱に近い、形も色も丁度割かれた西瓜の一片のやう。そして全く色のみで光無く、輪廓の外は直に真黒な空である。今や傳通院の屋の棟に没せむとして居る。

「あの月、人を睨んでらア。」

左も怖さうに勇が云ふ。桂一は戸を閉めた。月が人を睨む、八歳の子に巧い表白

を教へられた。赤い月人を睨むや藏の上、はどうだらう等と思つた。

桂一は小供の時豊國の書いた東海道の遊所の雙六を見た。その上りが吉原仲の町の夜景、何でも冬の夜かなんかで寧ろ淋しい光景を描いて、真黒な空に傾きかゝる半月があつた。其半月の形が如何にも薄氣味悪いものであつたのを、今も記憶して居る。盞の大きさを濁つた朱の色をなした月が、知らぬうちに家の間から覗いて居るのを見て、まるで妖怪だと思つたことが屢ある。月に對する恐怖と云ふものの、それは幾干か道樂に恐れて見る氣味があつた。勇は真面目に恐れて居るらしい、など、思つた。

この頃勇の手の爪が黒くなつて痛みを感じると云ふ事があつた。近所の醫者に診て貰つたら、大學の皮膚病科へ行つた方が宜からうとのこと。桂一は妻春子をして勇を大學へ連れて行かせた。

田村博士が自ら診察しようとして二人を診察室に招いた。博士はこの爪の病はオ



ニコシスと診断して、局部にあてるガーゼを鉄で切り始める。勇はその鉄を見るや、前額に手をあて、俯向いた。

「頭が痛いんですか。」

と博士は手を止めて勇に問うた。

「伯父さん、僕はねえ。」勇は椅子を離れて、熱心に博士を見詰めた。朗かに斯う云つた。「僕はねえ其の鉄を見ると、前頭が痛い。」

春子は喫驚して立つて、勇の活々とした美しい眼を見詰めた。博士は霎時黙して勇の顔を凝乎と見詰めた。運搬車の軽い響が室の外を過ぎる。

「それを見ても痛い。」それを見ても痛い。」と勇は机の上に置いてある小刀や錐に類した針に類した醫療器具二三を眩しげに指さした。

「解りました」と博士は極めて柔らかに云つた。「坊ちゃん、此所も痛いんでせう。」と、机の角を指した。

「あゝ、痛いよ。」と勇は少し顔を背けつゝ、「さうねえ、光つたねえ、尖つたものを見ると、痛いんだ。」と、訴へるやうに云つた。いくらか発見の快さも現はれてた。

「よく前から頭が痛い」と申して居りましたが、尖つた物を見ると痛いなんと云ふ事は、今始めて申しましたんです。如何したといふので御座いませう。」先刻から顔色を變へてた春子は辛つと斯う博士に問うた。

「坊ちゃんはこの方お一人なんですか。」博士は問ひに答へず。

「ハイ。」

「然うですか、大事の坊ちゃんですな、……久喜さんに診察を願つたら宜いでせう。」

久喜さんは精神病科の有名な博士である。春子はこの言によつて勇は難しい精神病者であると知つた。



「久喜さんは存じませんが、西山さんでは如何で御座いますか、西山さんならば御懇意に致して居りますが。」

「あゝ西山さんでも結構です。兎も角お幼いのですから、御注意なさらんと不可ません。指の方はこの薬とこの薬をお用になれば、一月位で癒りませう。」

「有難う御座いました。」伯父さん、左様なら。」

「左様なら、怜悯な坊ちゃんだ。斯う云ふ坊ちゃんには記憶が異常に能いものです。云ひく博士は勇に帽子を冠せてやり、室の外まで送つた。」

この時桂一は勤め先なる書肆の編輯局で筆を走らせて居た。給仕が、お宅から電話です、と知らせた。桂一は電話で春子から勇の症状の大略を聞取つた。もとの机に歸るや、「僕の子供はねえ」と今電話で聞いた不思議な症状に就て語つた。同勤の朋輩は妙からぬ興味を以てそれを聞いた。

「筆を執る者の子は完全な者は出来んなあ。」

「併し君に似たんだ、君の神経質が、子に至つて麻大されたんだ。」

「大きくなつてからなら宜いけれど、そんな幼いうちに然ういふことがあつては苦しくて耐らないだらうなあ。」

朋輩は口々にいろんな事を云つた。桂一は非常に心配であるけれども、併し何だか、勇が大きな藝術家になるやうな心持がする。天才の幼時にある奇癖奇病、それであるやうな心持がして、楽しみなやうな氣もする。併し朋輩の誰一人、勇さんは天才ぢや無からうか、など、嬉しがらせて呉れる者は無かつた。

勇は天才ぢや無からうか、桂一は斯う思ひ續けた。陳腐なる、親の慾目といふ奴、と自ら嘲笑つても見たが、矢張り思ひ續けた。今年の夏の夕暮、勇が縁側に立つて、隣の李の樹の梢を仰いで、「君、遊びに来給へ、え、明日、明日ぢや無くつても宜いぢや無いか、今から來給へよ。」など、喋つてるのを桂一は見たことがある。「誰と話をしてるんだ。」と訊くと、「彼處に坊ちゃんが居るぢや無いか。」と



李の梢を指す。桂一は其の方を見たが、何も無かつた。木の枝などの工合で人の顔のやうに見える所があるかと注意したが、それも無かつた。勇は父の怪訝な顔つきを見て、轉がつて笑つた。子供は幻視をすることがある、と桂一は何かで讀んだことがある。勇は果して李の梢に童男の幻を見たのか、或は唯閑戯にあんなとを云つて見たのか、どちらとも判らないで済んだ。あ、又頃日の坊ちやんが居らぬ。」と數日後に勇が同じ梢を見て云つたことがあるが、桂一は別に氣にも留めなかつた。今思ふと、あれも幻視であつたかも知れぬ、と桂一は思つて、愈我が子が常軌を進む人間で無いやうな氣がした。

桂一が其の夜歸宅したのは十二時頃であつた。春子の外は皆寢て居た。勇も無論熟睡して居た。桂一は書齋の一隅に敷いてある床に潜り込んでから、春子を呼んだ。春子は火鉢の傍に坐つて今日の逐一を報告した。

「伯父さん僕はねえ、と勇が云つた時の態度は、實に美はしいと思つた。かう莊

重なやうな心持がしてゾツとしました。」と春子は其時の感じを殊に細かく語つた。

春子も桂一も暫く黙して居た。夫婦とも、勇の平素を思つて、その異常に伶俐な態度を顯す事や、狂人じみた行動のある事などをつくぐと考へた。

「長く生きる子ちや無いかも知れませぬねえ。」春子はしみじみと斯う云つた。

「何も長生きするが人間の能ぢや無い。オットー、ワイニングルは肉と暗の力に恐怖して、たつた二十三で自殺した。併しその短い生命の間に彼は偉大な哲學を發表した。徒らに常識に富んで、徒らに健康で、長生きして、凡人でするよりは、二十だいで病死するか自殺しても、大きな事をした方が偉い。橋の渡り初めをする老人を見ろ、皆凡人だ。」桂一は口を蒲團の外へ出して、電燈を見詰めながら云つた。

「何だか楽しみのやうですなえ、どんな者になるか知ら。」と春子は何と無く、真



向うに掲げた「ルブリエン夫人と其女」の寫しの額を見る。夫人は聖母になり、女は基督になる。基督は勇になり、聖母は己になつた。一刹那、あらゆる筋肉が引締るやうに覺えた。「何になるでせうねえ。」

「繪を非常に好いて描くから美術家になるかも知れん。文藝家になるかも知れん。或は哲人になるかも知れん。解らん。併しまだ十だいで死んで仕舞つては、如何に天才でも何も出来ぬ。天賦の力を發揮するまで生かして遣りたいものだ。あまり叱るな、さうして舉動によく注意しとれ。兎も角明日は西山さんに診せるが宜からうが、強ひて癒して凡物にして仕舞ふでも無からう。」

桂一は、勇は常規をポク／＼歩いて行く人間では無い、と思詰めて居る。ブライーンは、天才の状態は狂であると思つてた。勇が長じて屢々強烈な天啓を感じて偉大なる創作を成す。醍醐として、模倣ばかりして居た日本の藝壇はこゝに始めて自發の光を輝かす。こんな事がつい近き將來に起ると思ふ。自分は其偉人の

父たる光榮を得ると思ふ。父たる光榮。こんな他に隨從した光榮などを桂一は今まで思つたことは無い。

自分が自分の感じた儘を自分で思ふ様書く、自分が満足して自分がそれを賞める。自分はこれを此上無き光榮に感じ、勵まされて、更に次の作に取りかゝる。興衆は遠巻きにこれを見物して居る。自分の作りあげた物、それに自分は賞辭を與へない時、或は興衆が讚歎の聲を揚げるであらう。自分はそんな聲に斷じて動かされる。自分の作りあげた物、それに自分が非常な賞辭を與へる時、或は興衆は地に唾して去るであらう。自分はそんな事に斷じて動かされる。然れども、作の努力を間斷無く續け行くうち偶然、自分の賞辭と興衆の讚歎と相一致する時がある。この時興衆の囀は自分に近づく。この時以後、自分讚して興衆直に讚し得ざる時、興衆は跪いて、妙味いづれに在りや、と問ふ。自分は、唯味へ、と答へる。暫くあつて興衆のうちに讚歎の聲を發つ者がある。自分は莞爾として其者の



手を把り、御身は手に近き者ぞ、と云ふ。其者は歡喜の涙を垂れる。所謂「手に近き者」は月に歳に多くなり行く。斯くて自分は手の力の續かむ限り作し、手の力盡きて床に横たはり、侍する所の「手に近き者」に對して口を以て説く。口は力盡きて、自分は輿衆に圍繞されつゝ大往生を遂げる。これが桂一の理想であつた。後に彼はこの理想を訂正した。この理想では、輿衆といふ者を甚く下に見て居るやうであつて、實は甚しく重んじて居る。そこが氣に食はぬ。唯自分の思ふ儘を自分が書いて、自分が満足する所まで進む、それだけの理想にした。輿衆は彼の存在を知らないで居る。彼は輿衆の爲に書くのぢや無いから、輿衆に彼を知る義務は無いとも云へる。唯利に敏ならざる書肆が彼の作を上梓する。それが一向に流布せず物の陰に棄てられて、星移り物變り行く。それでも宜いと思つた。桂一は時に珍本を見る。所謂珍本の一種類に、非常に面白いものを發見するところがある。そして其面白きは、著者の思ふ存分なる自己發揮に存して居る。普通

的の素が交つて居ない。それが即ち世に流行しなかつた原因で、珍本となり了つて居る。さういふ種類の珍本に逢着する毎に、桂一は、偏狹の旨味とでも云ふやうなものを、つくつく思ふ。自分の産み出す物は、こんな物であつても可いなどとも思つた。その思ひには多少の淋しみがある。輿衆に圍繞されたる大往生、前きの理想は極めて絢爛なものであつた。今は偏狹に籠らうとして居る桂一、兎も角外目からは消極に傾いた形に見える。

勇、彼に異常の人となるべき徴候がある。この新しき希望は桂一の心を躍らせた。そして殆ど己を忘れしめた。偏狹の旨味、それをも發揮しないでも宜い。唯この後は勇をして十分に天賦の才を發揮せしむるに努むれば宜いのだ、と思ひ詰めた。

「春子」と呼んで彼はこの心的生活の徑路を妻に語らうとした、が止めた。逆も解るまいと思つて止めた。涙が桂一の枕をしとゞに濡した。



唯頭腦に少し損所があるだけの凡兒勇は、お正月が来て紙鳶を揚げてる所を夢に見て、たわいなく熟睡して居る。

裸 百 貫

文藝委員が定まつた〜と妻や弟や高尾君などが大騒ぎ、新聞を展げて且つ語り且つ笑つて居る。私は朝飯を食つて居る。その前で委員の名を讀上げる。局外者の此事に就ての批評を讀上げる。私も多少の感を起した。あの先生はどう云ふお積りで承諾されたのであらう、この職の爲に起る不快によく耐へるお考であらうか。あの先生とあの先生とは文界の恩人と見えて實は文界の敵である、餘りに親切過ぎ餘りに世話を焼き過ぎて不知不識罪を犯して行かれる。あの人の人は先天的の文藝委員だ。この人は嬉しがつてるだらう。この人は唯だ飄々乎としてなつたのであらうが、人間には自己の考と云ものも必要だ、飄々乎として

泥棒でもやるやうになつては大變だ。など、考へる。新聞に出てゐる其の人の写真を暫く見て居ると、何か斯うあはれな果敢ないやうな感じがして涙が出て来る。諸大家のこれに對する議論、大抵は此事を非難して居る。併し何も人の自由だ。斯う云事を企てたい人は企てる。委員になりたくない人は断る。なりたくない人はなる。他の爲さむとする事を傍から無暗に妨害するとは不善だ。唯天下の作家が藝術の自由と云ふ平凡なことを、何物にも賺されず欺されず忘れないで居れば宜い。彼の委員輩が文界の暴君となる時があるならば、それは天下の作家等の罪である。彼の委員輩が無用の長物となつて、彼等をして生欠伸をなさしむる時が来るならば、日本の文壇はなほ誇るべき物を有して居るのである。活ける人間眞の人間は何物の拘束をも受けてはならぬ。大手を振つて行かむとする道を濶歩すべし。など、も考へて居るうち、私は暫く忘れて居た原井乙雄と云一青年を思ひ起した。



色の淺黄い眉目の涼しく鮮かな健康な青年であつた。松根王壁先生の事に關してお目にかゝりたいとのこと。松根先生は私の尊敬してゐる作家であるし原井乙雄の名も記憶して居るから會つた。原井は端座して明快に語り出した。「私は既に半月以上松根先生のお宅に養はれて居ります。今月から早稻田大學に入れて戴く筈になつて居ります。昨夜突然先生が僕を呼んで、君は東京新報に僕の事を悪し様に語つたと云事を聞いたが本當かと詰問されました。私は咄嗟の際眞を語る勇氣を失ひました。私は今までも屢この勇氣を失つたが爲に心ならず虚言の罪を犯したことがあります。昨夜もそれでした。先生は、それでは其事が無根であることを沼波氏に證明して貰つて来い、と被仰いました。それで伺つたのです。」

私は當時東京新報の記者であつた。或日の夕方丁度地方版の編輯の終つた時木積と云外勤記者が私の所へ来て、今原井乙雄と云書生が来て誰かに會ひたいと云ひましたから私が會ひました所、この原井と云ふ書生は、松根氏の小説「農民」

の材料を先生に與へた者で、或報酬を約束してこの材料を提供し、なほ屢々松根氏の質問に答へる爲氏の宅に行き、頓て小説は完成したが、氏は些の報酬も原井に與へない。詰り松根氏は詐欺をしたのである。名望ある氏の如きも斯る敗徳の一面がある。此事の顛末を新聞に書いて十分筆誅して貰ひたい、と言つて詳しく話して行きましたが、如何でせう、書いて下さいませんか」と云つた。松根さんは決して詐欺などをする人では無いと僕は信ずる。併し知名の人は必ず富裕のやうに若い人は誤解し易い。松根さんだとて、大分厄介になつてゐる人も多いやうだから、餘裕のある人では無からう。斯しようと思ひつゝ、實行の時期が遅くなること云こともあらう。今度君が其の原井に會つたら、もう暫く黙つて待つて居給へ必ず何とか報いられるであらうから、とよく諭してやり給へ」と私は云つて、私が恰も松根先生の名譽を防護し得る位置に居た事を幸福に感じた。其後私は遠倉博士の夫人に會ふ折があつた。夫人は近頃松根先生に師事して居るとのことであ



つたから、私は松根さんに關して斯くくの事がある、目前の仕事の忙しい爲に、斯う云事をつい忘れて居ると云ふ事がある、若い人の頭では、世を簡單に考へて、先方は自分の事のみ考へて居るやうに思つて、待ちに待つて待ちかねた未深き恨を抱くと云ふ事がある、何うか早く處置をしてやられたら宜からうと思ふ、今度奥さんがお會ひになつた時一寸此事を御注意なすつたらいかいと語つた。

原井の語る所によれば、私が遠倉夫人に此の話をした時は、既に原井が松根先生の許に引取られて、寧ろ過大の報酬を受けつゝあつたのである。そして昨日先生は夫人より私の注意を聞いて、原井を詰り、其の知らずと答へたる故を以て、證明と云事になつたのである。私は松根先生の原井に對する要求を至極御尤だと思ふ。而して又原井がつい知らぬと欺いた事も、怪しからぬと責めたてることも出来ない。私は暫く黙して居た。原井語を次ぎて云、「私は前には松根先生を全く誤解して居ました。今はよく先生を了解して居ます。それなのに私は私の罪を先

生に自白する機会を失ひくして、到頭昨夜先生の方から詰問にあひました。而して私は先生を欺いて仕舞ひました。私は自分を善人と信じて居ります。心は眞に善であるのに、私の口は屢惡を爲します。この一身の不統一が残念でく耐りません。この一身の統一の期はなかく遠いやうに思ひます。斯る罪を先生に對して犯しつゝ、私は先生の厄介に今後なることは、逆も耐へられませんか。私はもう先生の家を去ります。去らぬばなりません。斯う云ひさして原井はハラ／＼と涙を落した。耐へるとか耐へぬとか云事は、其の當事者自身の心持で、他人が容喙する餘地は無いものだが、折角先生の厚意で、今月から學校へも入れて貰へると云場合になつて、袂を拂つて去ると云事は、更に先生に對して濟まぬとを重ねるのでは無いだらうか。たとひ昨夜君が先生を欺いたとして、今日歸つて改めて自白して誠意を以て謝したら、許されんと云事は無からう。君の一身に取つて大事の場合だ。君が獨りでは謝しかねると云のなら、私が先生を訪うて謝して上げて宜



い。「その御親切は有難う御座いますが、今それをして戴いては困ります。私が先生の家を去つた後で逐一御話して戴きたいのです。私は兎も角今後松根先生の御厄介になることは出来ません。私は昨夜徹宵して考へました。私が松根先生の御蔭で學校に入つて、卒業して藝術家になる。斯う云事を想像して見てどうも不安に耐へぬやうに思ひます。藝術家として立つは虚偽を以て立つなりと云考が起ります。今度の入學が更に新しき不安新しき不快を醸すに違無いと思ひます。私は現在以上に文字を知ると無く、誰の保護も受けず、この肉體の勞力で口を糊して天空海澗の生活をして終るのが、最も適當だと思ひます。」具體的にいへば何をしようと思ふんです。」漁師です。漁師にならうと決心しました。」

原井の如きは、他の言に左右されず、己が思ふ儘を爲さずば止め青年である。私はこの青年に對して、飽くまで、學校に入れ、卒業したら月給取りになれ、なにと勸めるとは出来ない。彼は詰問の事のみ故に松根氏方を去ると云で無く、

これを動機として今は如何にして生くべきか、と云問題に逢着して居るのである。寧ろ原井の言には私の賛同せざるを得ない所があると思つた。この前年の秋私は北海道に行つて、酔つたやうな心持になつた。北海道の人は各鋭き獨立自尊心を把持して誰に向ても阿諛めいた態度を爲さず勞働の報酬は我これを天より得むとて斧を振り鉞を取り或は網を投じて無盡藏なる山海の富を捨て居る。「彼等活動の舞臺の背景には地平線まで連なる樹海あり四顧秋草の外物無き平原あり九月已に寒潮の色ある大洋がある。」蟋蟀すたく薄女郎花の間に立つと日没したる山際より猩紅の色空様に漲ちぎれ雲も楢林も秋草も汽車の煙も東に聳ゆる十勝岳の巔も悉く燃ゆるが如く染めなされた、夕焼は北海道の一名物と聞く。「楢楸椴松落葉松晝晦く枝を交す間に所々紅を點するは楓樹、高く緑を翻すは猿麻栲、蔭には細流迂曲して岸に六尺の石蔭が搖れる。」楸樹の蔭に低い垣が紆つて板葺の小屋からは乳牛の長吼聞え、襯衣を肘まで捲つた人が乳桶提げて鈴蘭茂る徑を傳



うて行く。「東方を瞰下すると見ゆる限りの大傾斜、穂芒の波煌き渡り、落葉松の森林遠近に一擲つと投散らされて、傾斜の果と大空の間には、渺々たる十勝の樹海が翠の潮を漲らして居る。」之等の印象は歴々としてなほ目の前にある。北海道よりの歸路、汽車の中で麗水君がいつた。「東京で勞働的に文を賣つて食つて行く」と云ふ事は耻づべき事では無からうか、僕は男子らしき生活と云事をつくつく思ふ、あの音更あたりで大豆畑の守りでもして米鹽の料を天より得て暮すと云事がそれでは無からうか。私は丁度其の通りのことを考へて居たときであつたから飛び上がるやうに思つた。「さうだ、そして書きたいときに書いておくさ。心悠々として自然に契合するやうでなくては、眞の高い藝術は出来る筈が無い。君も移住しないか、僕も必ず行く。水眠も楓曉も勧めたら行くに違無い、同趣味の人が部落を作つて鋤を取つて食ふ、僕婢にはアイヌを使ふ、愉快だらうなア」と云つた。そして獨歩が東京の方に唾を吐き棄てて一散に北の國に走つた心持を始めて

知り得た。森林に自由存すと歌つて原始の大深林に分入つた心持が能く解つた。而て彼が何故に再び東京の人になつたかが解らなくなつた。私は北海道から歸つてこゝに八ヶ月、男子らしき生活、北海道、と云事が殆ど思慮の全部を占領して居る。原井が裸百貫の男で押通さうと思立ち、且つ思立つた刻下に實行しようとする勇氣は、私を煽つた。億劫がりの私は、歸京直ちに移住をしさうにして居ながら、今日まで惰性で、毎日、新聞社へ通つて不良少年の檢舉や吉原の無理心中などまで書いて暮して居る。私はこの際原井に意見をすどころか原井から意見をされてるやうな心持になつた。

それから又斯う云ふ事があつた。私の親友堂間が嘗て三重縣の中學に奉職して居た時、同勤であつた漢文の教師菱原と云人が、獨り教鞭を執るは可し、他に絶えず願使されつゝ教鞭を執るは不快也、寧ろ戸外に出で、碧空の下に汗して生きむ、と思立ち、職を辭し、羽後の岸を距る數里日本海の荒濤の中に横たふ飛島と



云群島に渡つて、漁夫になつた。私は堂間の紹介でこの菱原に會つた。飛島と云所の風俗の原始的なこと、外來の人を拒む習はしであるので、菱原は蓄音器を携へて渡り、その不可思議なるカラクリで人心を收攬して、やつと仕事に懸ることが出來た、と云話も聞いた。又その飛島が風雨怒濤に圍まれた光景を寫した七言絶句を送越したのを見て、彼の境涯を羨しく思つた。

原井が漁師になりますと云つたのを聞いて、私は直に菱原に想到し、原井の一身を菱原に托せむと思つたのは、私の當時の心では斯くせざるを得ぬ處置であつた。原井は大に喜んで飛島に行かうと云ひ、なほ其旅費は今日の午後中に自ら拵へて來ると云つた。私は兎も角松根先生に會ふ必要があると思つたから、明日午後先生を訪ふと云ことを、原井をして先生に通知せしむることにし、原井が辭し去るや、直に文部省に行て堂間に面會し、菱原の現況を聞き原井の事に就て相談した。

翌日の朝意外にも松根先生が來られた。先生の訪問を受けたことを大なる光榮に思つた。先生は少し赤みが、つた目をして、朝日を吸ひながら徐ろに語られる。昨夜原井が歸つていろく話をしたが、どうも要領を得ぬ、私も原井の一身に對しては責任がある、一體どう云積りで居るのかと云ふことを承りに來ましたとのこと。私は一伍一什をお話した。先生も、原井は自分の意志にしか従はない男だから、思ふ儘にしておくより仕方が無い、漁師になりに行くも悪くは無からう、出發の際には旅費は私が出してやりませう、と云はれ、彼は若い哲學者です、哲學者たることは結構です、唯若い哲學者だから、少し困ります」とも云はれた。先生は去られた。私はこの時始めて先生の音容に接して多大の教訓を與へられた心持がした。この後今日に至る迄私は先生に會はぬ。今日の日本に於いて、今日の社會に於いて、今日の文壇に於いて、先生は唯一人目の開いてる人である。その頃私はそんなにも思はなかつたが今日になると、實に先生は無くてならぬ人物



である。この人一度筆を擲れば今の文壇は闇である。松根先生は着物を着ることが嫌ひで裸百貫主義、原井も裸、私も裸を尊む。裸で押通さうとする人間、大小の差こそあれ、この同じ主義の三人が、互に意外な心の交渉をしてるのを、深く趣味あることと思つた。

其日の午後原井が来た。「旅費は出来ました。明朝飛島へ向ひます」と云つた。彼は先生が私を尋ねられたことを未だ知らなかつたから、其事を告げた。原井は松根先生にいろいろ心勞をかけたことを如何にも濟まぬといひ、他日必ず御恩報じをするといひ、私にも厚く禮を述べて去つた。數日経てから酒田の宿屋から出した原井の手紙が来た。東京は花の盛りの今日此頃を彼は積雪を踏んで進んだ。酒田から飛島へ渡らうとすると、毎日の風雪で、日本海は荒れに荒れて、當分交通の途の附く見込は無い、困つた、と云つて来た。彼に飛島の漁師となる運命は無かつたと見えて、十餘日経て東京に歸つて来た。菱原は恰も遠洋漁業をして居

る時で、歸りの程も解らず、再來を期するより仕方が無いと諦めて歸つて来た、と云ふので、松根先生に厄介になる前に居た大久保なる伯母の許に身を寄せた。彼は屢々私を訪うて身の過去を話し將來を語つた。原井の伯母さんも来たことがある。

原井は郷里で資産のある伯父の家へ養子に行つた。所がその伯母が歿した後卑しい女が入込んで家庭亂れ、彼は不快な壓迫を耐へねばならぬに至つた。人は他に服して生きるべきで無い、と彼は勇猛心を起して其家を去り、東京へ出て来た朝鮮へ出稼ぎを志したが不成功だつた。大久保なる伯母は彼を宅に置いておかうとしても、永く世話になつては濟まぬ、と云つて山間の僻地に入つて鋤を執つたこれも事情が起つて止めねばならぬこととなり、又東京へ来て車夫になつた。萬世橋に客待をしてると、若い男が「ナカまで行け」と云ふ。「ナカとは何處です。」「話せねえ奴だなア吉原さ。」「さうですか、吉原は何方です。」客の云儘の賃錢



で客の教に随つて、やつと辿り付いた。樓の女が客からの祝儀を呉れる。いつも賃錢を貰ふと同じやうに指で掴み取つた。「お前さんは祝儀を貰ふ法を知らないんだね、斯う云所へ曳いて來れば屹度貰へるもんだからね、覚えておきなさい、手を斯うしてさ、指を揃へて、斯う伸ばしてさ」と其受け方を教へて呉れた。こんなこともあつた。病人の見舞に行く奥様を乗せて、車を揺ぶることの甚しい爲に折に入つた卵をみんな割つて仕舞つて、其償ひに強ひて車賃を返したこともあつた。其のうち傳通院脇の坂で這つて向臈をひどく痛めて名倉へ一月半通つた。伯母さんがこの際涙を流して柄に無い事を決してするな、と諫めたので、怪我が癒つてから大久保に暫く居た。又飛出した。何でも桂庵の世話になつて新宿の蕎麥屋の出前に住込んだ、と云ふことを伯母さんが聞込んで、桂庵から桂庵と尋ねまはつて、やつと出前の周旋した新宿の桂庵に辿り付くと、十歳ばかりの女の子が赤ん坊の守りをして居るつきり。隣で聞くと、主人が端書の二重使ひして、警察へ今

呼ばれて行つた、内儀さんも心配して一緒に行つたとのこと。内儀さんは直き歸るだらう、待つて居ようと思つて上り込んで、ふと奥を覗くと、どうでせう原井が成程出前の姿で長火鉢の前に居睡して居る。聲をかけると喫驚して、蕎麥屋は勤めきれないので外へ周旋を頼まうと今此所へ來て見るとこの始末、私も誰か歸るまで待つて居る所だと云。伯母さん無理強ひにこゝから原井を家に連歸つた。松根先生の文名はこの頃旭日の如く輝き渡つた。原井は己が經驗を先生の材料に提供せむと申出た。それからの今度の成行である。

私はその頃、自分の現時の生活状態が全然自分の當初の志、主義趣味に背いて居ることに氣が着いた。自分と云ものが見る／＼削られつゝあるに氣が着いた。生活に自動と受動とがある。人偉なれば自動即受動受動即自動の境に入る。この境に達する迄は自動受動の二部に生活を分て居なくてはならぬ。その境に至る途すがら自動のみで進めば愉快である。北海道に行けば夫が出來ると思つてた。



併し北海道には本が無い。私は本に執着する。女無くして酒は飲める。本無くして自然に對する事は出来ぬ。本に富む東京を去ることは出来ぬ。此地に留つて二部生活をせねばならぬ。當時の私は純受働生活であつた。私は自働部を得むが爲に、職を新聞記者のみとし一切の書肆の注文を斷つて、陋巷の蝸廬に移つた。

原井が始めてこの蝸廬を訪うた時、「労働者の仲間に入れば自ら労働者根性になる。己れを守るに似て己れを傷つけて行くやうな結果になりはしまいかとも思ひます」云々と云つた。原井の哲學は稍若き境を脱せむとして居る。そして新しき煩悶に入つて居る。私はこの青年の爲に此際新に指導者を選んでやる必要があると思つた。そして新渡戸稻造氏に思至つた。或人は氏を俗人の如くに評する。併し私は氏の友人から、氏が北海道旅行中船に乗合はせた見ず識らずの女、それが密賣女に賣られて行く途中なるを聞いて、即坐に身代金を與へて郷に歸らしめた、と云話、其外これに類した様々の話を聞いてた。不識の書生等にも快く面會して

身の上の相談をしてやられる事も聞てた。私は氏に面識は無い。唯氏に稜々たる俠氣のあるを信じて、私は原井のことを手紙に認め、然るべき示教を乞ふ旨を記し、「原井君、君は今迷うて居る。併し私が今君に方針を定めて上げると云資格は無い。新渡戸氏に教を乞ひ給へ。この手紙を持つて行て十分胸中を披瀝して而して氏の言に聽き給へ」と云つた。氏は原井を引見された。未知の男が唯一通の手紙で未知の男を紹介した。そのみで氏が多忙の時間を割かれたと云事を、私は永く胸に銘して居る。事實には平凡な小説のやうな事がある。意外にも新渡戸氏は原井の生母の幼友達であつた。氏は「この解決は今直には着かぬ、時間を要する、兎も角私の所へ寄寓することにしたら宜からう、其寄寓方法の如何に就ては來週の木曜に話をしよう」と原井に語られた。

原井は其木曜に再び氏を訪問して氏の保護を斷つた。私はこれをも非行として責める理由を見出さなかつた。絶對無拘束の生活の爲に、世の所謂安住の機會に



逢着する毎に努力してこれを振棄てた惟然坊の心は即ち此の原井の心である、と思つた。原井は間も無く東京を去つた。其後の消息は知らぬ。彼は或は病心の人であらう。愚者であらう。狂人であらう。左れど已れの自由を守るに努力したる點を私は重んずる。この點に於て私は原井を師友とするに躊躇しない。

當局者は今や文藝の保護發展を計らむとしつゝある。極めて親切なものである。然れども文藝の眞意義を知る作家は、斷じて此親切に嬌えてはならぬ。當局の親切を無にして憚らぬこと、原井が諸先輩の厚意を振棄てた如くなれ。是文藝の爲である。自由の爲である。人間の爲である。

## 入學試験

「これからはお前の體が資本だ、自家の身上は皆お前の體に注ぎ込んで仕舞ふの

だ、體を大事にせにあ不可ぞい」

祖母さんは長火鉢の灰に火箸でスポン／＼と孔を穿けながら、しみ／＼と斯う云つた。「うん」

と唯僕は答へた——寝轉んで東京の地圖を見て居た——。自家の財産がどの位あるか僕は全く知らぬ。兎に角遊學の資金位は十分出るだらうと思つてる。中學校を卒業したから今度は高等學校に這入るんだ、それも第一が望みだから入學試験を受ける爲に近々上京する、極めて平凡な事柄で、遊學そのとに付て何等深い意味を僕は認めなかつた。祖母の言は右の耳から左の耳へ抜けて仕舞つた。唯僕が一心に思詰めてるのは入學試験に是非とも合格したいと云事だ。第一の志望者は例年千二百人位あつて、その中から三百人位しか取らぬのだ。僕は秀才では無い、人より十倍の努力をしてやつと人並に跟いて往けると云方だ、併し努力には十分耐へると、斯う云自覺をして居た。



「どんな事があつても入學らないか、落第したら死んでしまふ」と僕は心の底から云つた。

「返失敗つた位で死んで奈何なるもんだ、復た來年受けられ宜え、」

「そんな氣の長いことが、」

と呟いて地圖の根岸を探しかけると、十字軍の始まつたのは何年だつたと云ふ問題が閃然と僕の胸に飛んだ。暫くこの問題に心が集注する。宣戰は一〇九五、明瞭にこの數が浮ぶ。これだけ浮ぶとウルバン二世、ゴットフレ、アスカロン等と人名や地名がいくつも隅から轉がり出る。十字軍の始終は筆を執ると今でも書けると思ふ。先づ宜しと安心して再び根岸を探し出す。

僕は其頃晝と無く夜と無く様々の問題に飛附かれた。維管束の排置はどうだ、Aの零乗はなせ一だ、軟鐵と鋼鐵はどう違ふなど、いろんな奴が飛附く。飛附かれて其解答を思浮べる迄は實に切無い。其問題がギユウツと胸を締着けてる。解

答が出来ると問題が手を離す。吻と息がつける。

「坂田の家は停車場から餘つ程あるかい、」

祖母が地圖を見下しながら斯う訊いた。

坂田千春と云のは僕の伯母のお登美の嫁ぎ先の義姉お辰の先夫で、今東京で美術學校の教授を奉職して居る人で住宅は根岸だ。東京には親戚も何も無いので、こんな遠回りの縁を辿つて僕は世話にならうと云のである。

「今探してる所だ、……あ有つた、こゝが根岸だ、新橋は此所と、随分あるなあ、此丈」

僕は指を擴げて祖母に見せる。

「ふうむ、何かよ、鐵道馬車では行けんかよ」

「わえ、豪いなあ、鐵道馬車知つてりやあすなあ、鐵道馬車では行かんわ、荷があるもん」



僕は左も可笑しうに突ふ。祖母は「す、す、す」と舌の尖で苦笑ひする。極りの悪いやうな時に祖母はいつもこんな奇笑をする癖がある。

「あ、あ、どうも宜いのが無いで困つた」と溜息しながら、阿母様が大きな風呂敷包を引抱へて歸つて来た。

「どれ、見せさんしよ」と祖母は風呂敷の方へ手を伸ばす。母は包を解いて鳴海綾五反皆箱入になつてる上物を取り出して列べる。

「時候が時候だもんだで、何にしても品物が少いわなお」と母はまだ思ふやうなのが無いのを残念がつてる。

「これが宜いで無いか、これが品が宜え、これに仕置かんしよ」

「どうで千春さんはこんなもの着させまいで、まあ娘のだわ、東京の女子衆は派手なものを着させると番頭も云つとる。こちらの東京向きだと番頭は云ふかなお」



「これかよ、まるで藝子見たいな」

僕は風俗畫報の挿畫で見た東京風俗を思ひ出して、

「それが宜え、それが宜え、名古屋で笑はれんやうな物持つて行と東京で笑はれる」と一も二も無く所謂藝子見たいなのに賛成して仕舞ふ。鳴海綾一反駿河屋の三色煉羊羹一箱、これで、先づ坂田への土産は出来た。

「お前、本や何かチャンと揃へてあるかよ、今夜荷作する位にせんと、明日は人が来たり何かしてゴタ／＼するで、早くチャンと仕置かんと不可んぞよ、着物はもう皆揃へてある、それから坂田へ行つたらなあ、たとへ一晚厄介になるだけでも、女中に心附を仕置くもんだぞよ、それから、」

母は一昨日あたりから僕の顔さへ見りあ止め度も無く種々雑多な注意をするので僕は煩くて耐らぬ。

「解つとる、解つとる」と大聲で云つて退ける。



「解つとるで無ない。それの餘程よほどいゝんな事氣を注つげとつても、つい忘わすれるとがあるもんだわな、」と母は投遣なげるやうに言つたが、つい此頃嗅のみ覺はえた烟草を一服吸すひ込んで、

「今途いまで昌平しやうへいさんに遇つたら、桂様けいさまも愈お出發たちで御座ございますげなが、年の經たつは早いもんだで、立派いな醫學士いになつてお歸りになるのはもう直ちきのことだぞえもと言いはつせるでなあ、醫者いになつて呉あれるなら宜ええけれど當人たうじんがどうしても文學ぶんがくだ無いと遣やらんと言いひます、と言いつたら、文學ぶんがくたえどんな學問がくもんだなも、といつて、なぬに向むかうへ行いきやあすと、醫者いの方かたの宜ええとが直ちぐに解わかつて、屹度いお變かりになるに見みてらつせと言いはした。高等學校かうとうがくがうへ入いつてからでも變かりたいと思おもや變かれるものかよ。」

と語勢ごせいも成なるべく強ちやうぶめないやうに注ちゆう意いして云。僕の家わがやは醫者いで、小野さんといへば、あゝあの脚氣かっけの上手うまいなお醫者い様さまと名古屋なごやの人ひとは大抵たいてい知しつてる。小野と云い醫者

がもう一軒いっけん名古屋なごやに在あるが、これが本家ほんかで、僕の祖父おじいはそれから分家ぶんかしたのであるが、脚氣かっけが得意とくいで非常ひやうに流行はやりり、降くだるやうに金かねが落おちたけれど、美田みでんを遣こさぬと云風いで、更さらに貯蓄ちそくをせず、儲まうけた丈だけは死ぬ迄までに皆費みなかつて仕舞しまつた。祖父おじいの男おとこの子こは皆天死てんししたのでその後のちを繼ついた養子やしよが、僕の父ちちである。父ちちの代だいになつても可べなり流行はやりつては居ゐるが、祖父おじい時代のやうには行いかない。これは敢あて父ちちの腕うでが鈍鈍い爲ためでは無い。時代じだいの推移たいしの結果けいである。大黃だいわうや甘草かんさうや茯苓ふくりやうを眞鑰まんとくの匙さし子こで盛もつて、生姜せうがを二片ふたぺ入れて一杯半いっぺはんを一杯いっぺに煎せんじなされと云いて居ゐては效驗かうけんの如何いかを問とはず、世よが信しんじなくなつて來きた。藥籠やくろう入いの附ついた車くるまを乗回のりかした漢方醫連わんぱういれんが追々おそ歩いて病家びやうかを回まわるやうになつた。見得坊みえぼくの僕わがは中學校ちゆうがくで生理學せいりがくの論ろんや醫療法いりやうほふの話わなどが出る毎ごとに漢方醫わんぱういの子こであるを何なんとなく耻はぢた。

三代目だいだいめの僕桂一わがけいが醫學士いになつて即すなはち時代じだいに當符あてはまる醫者いになつて小野家おのやを挽回わんわくする。これは桂一けいたる者ものの是非取せいらねばならぬ責任せきにんで、世間よこも然しか思おもひ僕わがの兩親りやうしん



も然か思ひ僕も子供の時から唯何と無く自分は醫者になるべき者と思つて居た。然るに僕は成長するに従つて趣味の人詩の人情の人になつて仕舞つた。この第一の原因は父が趣味の人で生れ落ちから不知不識さう云感化を蒙らせたので、第二の原因は中學校の國語の教師の鈴木先生の講義に非常の趣味を感じた爲なのである。風景の世界人情の世界は僕の眼前に段々と色濃く光強く展せられる。形面上の問題に觸れずして、動物質を扱ふ醫者なんかには斷じてならぬ」

十八歳の僕は斯う考へて仕舞つた。小野家の全盛時代に育つて、しかも長い間弟妹が出来なかつた爲に、總掛りで甘やかされて取り返しの附かぬ我儘者に成上つた僕は、謀叛めいた此考を譯も無く堅め得た。

父は困つたとは思つたが、性質が極めて溫柔で、諦めが宜いので、僕を説伏せる等とは到底不可能として、一言も言はない。最も此の事に焦慮したのは母であつた。母は一夜中學校の校長を訪つて、僕に意志を曲げるやう意見して呉れ

と頼んだ。校長は學校で僕に簡単に頼まれた丈の意見を加へた。無論母に頼まれたとは少しもいはず自分の考を述べる體にして言つた。簡單ではあつたが校長の言である。外へ出ると従順で寧ろ臆病な僕は、一も二も無く、御意見に隨ひ醫科を修めます、と返答して歸つた。そして歸るや否や今日校長に斯う云はれた、醫者になるとにした、と語つた。皆これを聞いてやれ〜と安心した。

僕の様子はこの日からカラリと變つた。唯鬱ぎ込んで滅多に口を利かぬ。飯時になつても食はぬともある。嗚呼文學の人になるとは到頭出來ないのか、枕の草紙のやうな隨筆を書く、萬葉集の歌が悉皆解るやうになる、紅葉や露伴や浪六の書くやうな小説が譯無く書けるやうになる、人は唯慰みに聞流して居る淨瑠璃などを眞面目に研究して、坪内さん達のやうに、おさんの性格は云々お七の戀は云々と論じて見る、こんな愉快な會心な企劃は水泡に歸して仕舞つたのを思つて、暗碧なる波濤を凌いで草一つ生へぬ岩島へ流されて行くやうな心持になつた。全



く元氣が消耗した様を見て母が先づ心配し出した。

新刊の日本之少年を僕は巨燵の櫓に展げて讀んでると、方々の試験問題が書いてある欄に、醫術開業の試験「一、膝窩窩ニ就キテ述ベヨ云々」  
二、眼窩中ニ入ル神經及ビ血管ノ名稱ト其通過セル所トヲ述ベヨ云々」

とあるのに逢着した。自分はこんな方面の研究をこれから遣るのか、祖父や父のやうに、夜半にも叩き起されて出掛けねばならぬ、蒼い顔憂愁の氣に絶えず接せねばならぬ職業をするのか、と思ふと、醫者になれば儲かる、祖先の業を繼ぐのは正しいことだ等と時々思ひ返して見たのも烟散して、唯情無くなつて、雑誌の上突伏して哽咽げて泣いた。

「お父様」と泣聲で僕は呼んだ。隣室で藥を調合して居た父は來た。「お父様どうしても醫者にならない行かんか知らん」と訊いた。母もそこへ來た。この時僕の心は未だ嘗て經驗せざる眞面目な状態であつた。自我の理想を追うて文學者になるか

一家の犠牲になつて醫者になるか、の岐路に凝立して居る事を判然と感じた。そして今までは譯無く一路に顔を向け譯無く他路に顔を向けて居た而して兎も角校長の意見を聞いてからは醫者の路の方に顔を押し付けて居たが今、更に文學の路の方をも向いて見た。兩路を望んで腕を組んで扱本當に何方を選むか、と眞面目に考へた。もう孰方かへ足を踏入れねばならぬと考へた。此時父母が醫たるべき有力なる意見を更に聞かせて呉れたなら、醫たる覺悟が更に堅まつて動かぬものになつたかも知れぬ。

併し愛子の涙顔を見た兩親は、醫たれ、と嚴命し得なかつた。僕が孰方の路を進むも、路は險難である且つ長くもある、半年や一年のとなら好きな道も嫌ひな道も無い一思ひに經過し得るが、これ程我が嫌ひな道の長い間を辿ると云事は果して出来るかどうか、よし出来たところが人並勝れた者にはなれまい、我が好きな道ならどんな險難にも打克つて行けよう、そして或は人並勝れた者になれるか